大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
大正十五年三月一日發行每月一回一日發行）

建築と社會

（第九輯第三號）

大正十五年三月一日發行

日本建築協會



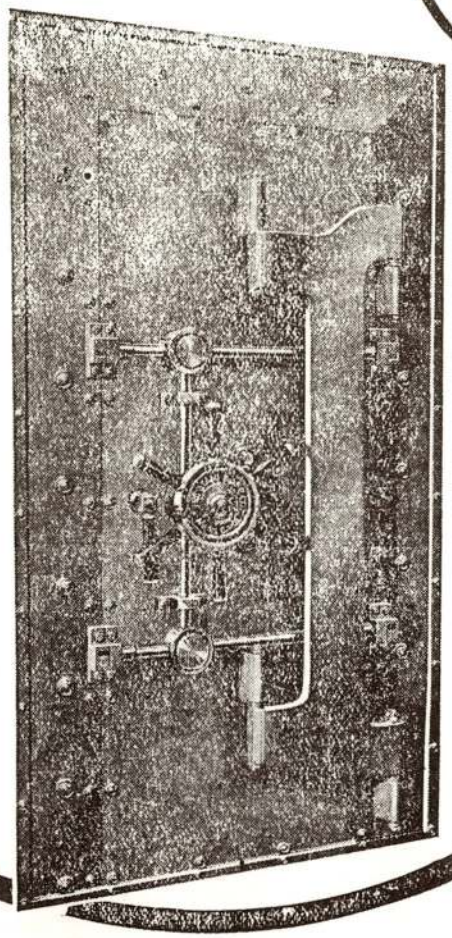
OTANI SAFE CO.



大谷製金庫室鉄扉

舶來型クランク式クラインダー仕上

本邦金庫界之權威



最近之御用命先

横濱正金銀行大阪支店殿
日本勸業銀行大阪支店殿
株式會社大林組本店殿
株式會社大阪ビルデイング殿
日本勸業銀行綾部支店殿

大谷金庫

東京 新富町
京都 松原通
大阪 淀屋橋
神戸 楠町六 店

日米板硝子株式會社

本　社　大阪市西區阿波堀通一丁目
工　場　九州若松市外二島（鐵道省指定工場）
大阪販賣店　本　社　內
東京販賣店　東京市丸ノ內ビルディング七階
九州販賣店　門司市大毎ビルディング三階

製品解說

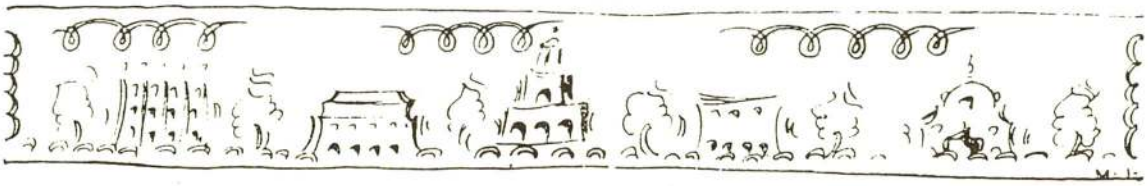
製造方法　世界最新コールボーン式自働連續板狀伸延製造法ト稱シ幅六呎ノ板硝子ヲ長サ無限ニ連續製出ス

特徴　精密ナル機械ノ標準ト硬化作用ニヨリ板面ハ反リ歪ミ無ク厚サ整等ニシテ質强靱ナルヲ以テ破損ノ虞少シ

厚味
二十四オンス品　並板（十六オンス）ニ比シ二倍ノ破壞强度及耐久力ヲ有スルヲ以テ學校病院工場會堂ビルディング等ノ高級建築及シヨウウインドウ用トシテ最適品ナリ
三十四オンス品　汽車電車等ノ窓硝子トシテ賞用セラル

加工品　摺　結霜　春霞

和洋建築窓、家具等ニ使用シテ面ル優美ナリ



建築と社會第

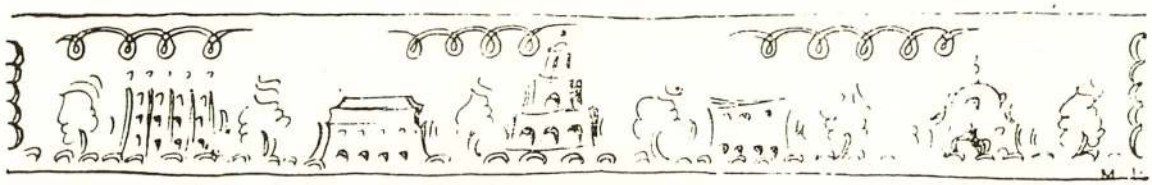
繪口

▲會場正面
▲第二事務所
▲野外劇場
▲會場の一部

電氣大博覽會の建築物

▲迎賓館
▲外國館
▲第一衞生館
▲保健衛生安全館
▲音樂堂
▲橋梁

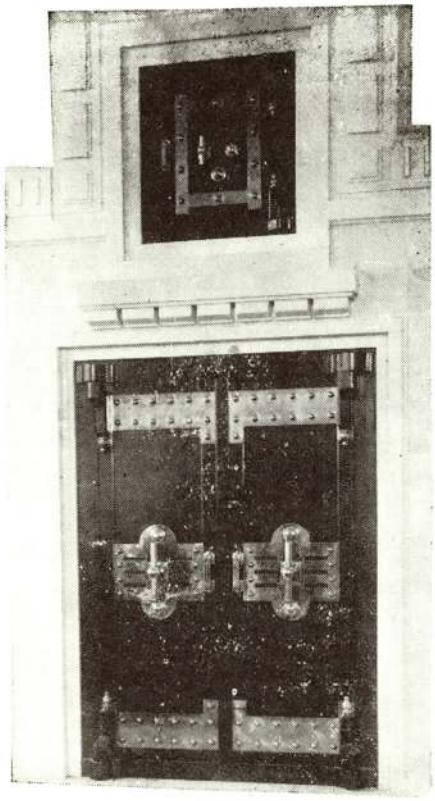
◇◇◇……感情より創造へ……一
●共同建築に就いて……渡邊鐵藏…（三）
●地方高等女學校に於ける「住」の教育に就いて……佐藤功一…（七）
◎巴里工藝博と日本建築……八
◎建築の本質に就いて……本野精吾…（三五）
●都市計畫事業は何故進まないか……西村健吉…（九）
◇◇◇……◇◇◇
●建築踏青鈔（の一）……廣岡峰太郎…（一四）



●建築に於ける容貌以上のもの……永尾篤次郎…(一五)
●新聞記者の觀た大阪の建物……二九
●統計の上から見たる住宅建築の傾向……松本儀八…(三三)
●飛鳥時代の寺院建築……岸熊吉…(二六)
●歐洲の建築界……四四
●木造最後の大劇場……池田谷久吉…(四一)
●建築踏青鈔(の二)……廣岡峰太郎…(三八)
●繩墨餘事……南信…(三九)
●郊外住宅の窓より……郊外住人…(四三)
●本月から開場の電氣大博覽會とその建物……松室重光…(四七)
●俳壇春風・足袋……齋藤溪舟選…(五二)
●俳話寫生の句……齋藤溪舟…(五三)
●日本建築協會々報……

大塚製金庫扉は

耐火耐震の理想を現實化せり！



御一報次第型錄差出申候
應貴意設計圖面調製提出可仕候

營業目科

金庫室入口防火扉
マンホール並ニ窓扉
倉庫出入口防火扉
鋼鐵製書函並ニ書棚
美術建築用銅鐵工事
御眞影奉安庫

最近御用命を蒙り納入せる尊名

三十四銀行　中埜銀行
三井銀行　濱飛農工銀行
三菱銀行　吉備貯蓄銀行
野村銀行　內國貯金銀行
山口銀行　嘉納白鶴店
大阪貯蓄銀行　鹽野義商店
加島銀行　東邦瓦斯株式會社
濱松銀行　名古屋 松坂屋呉服店
明治銀行　西海商業銀行
第二銀行　名古屋 岡谷本郎

創業明治二十年

耐火裝置の完成は？

凡ゆる倉庫を防火扉に

書棚と書函は木製を排し

須く鋼鐵製に！

大阪市港區九條南通一丁目一三〇番地

大塚鐵工所金庫部

所主　瀧村松之助

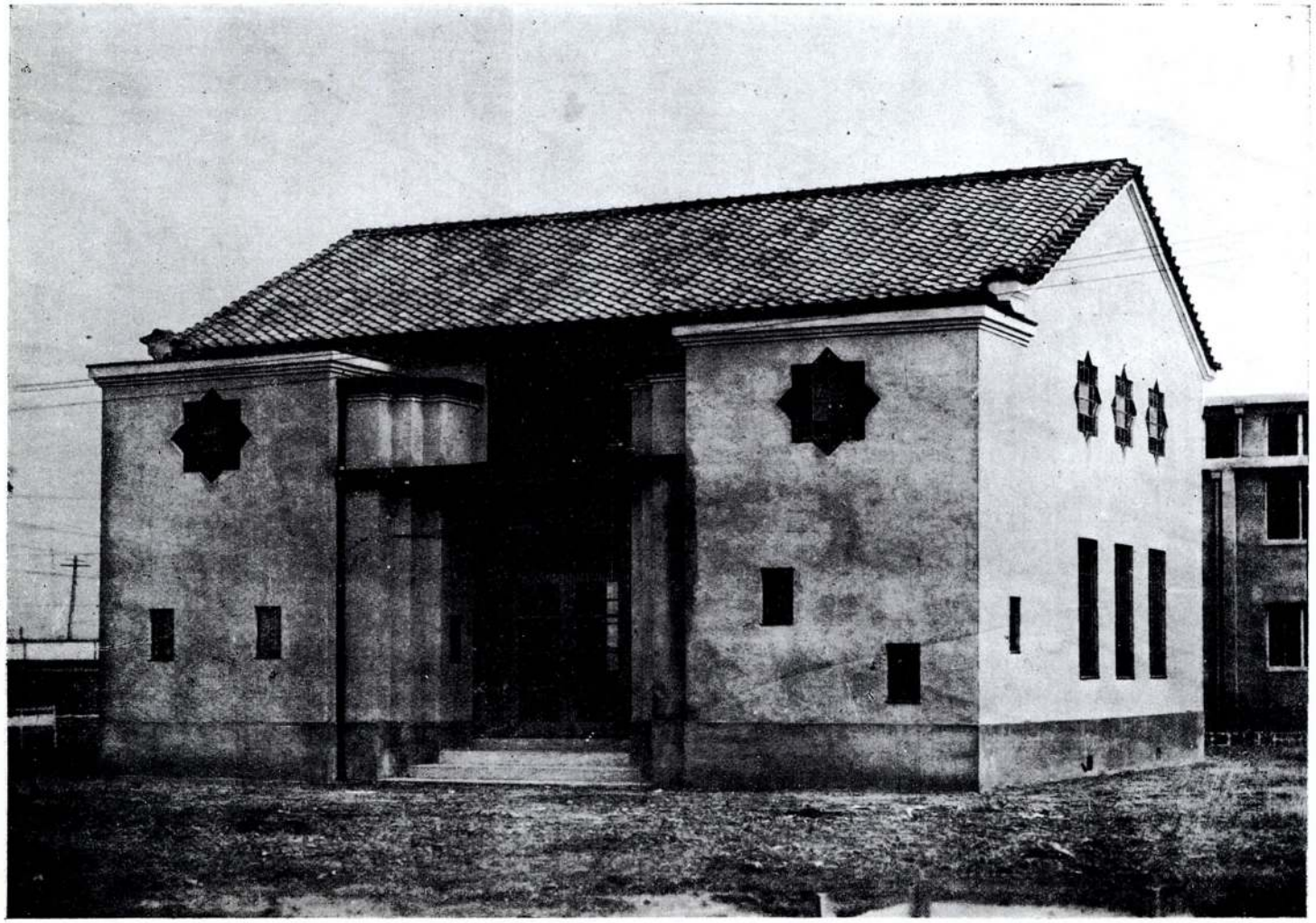
電話西五〇一七番

工場　九條南通一丁目、三軒家上之町、北境川町



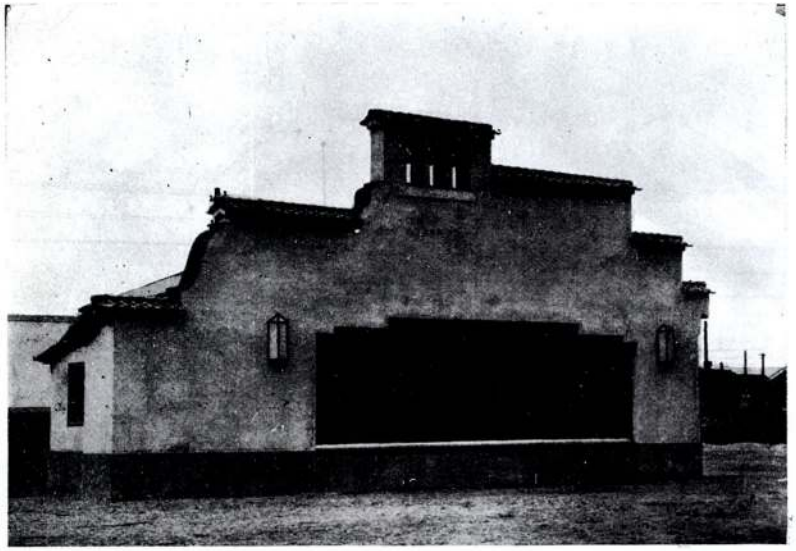
電氣大博覽會の建築物

——會場正面（以下本文參照）——



電氣大博覽會の建築物

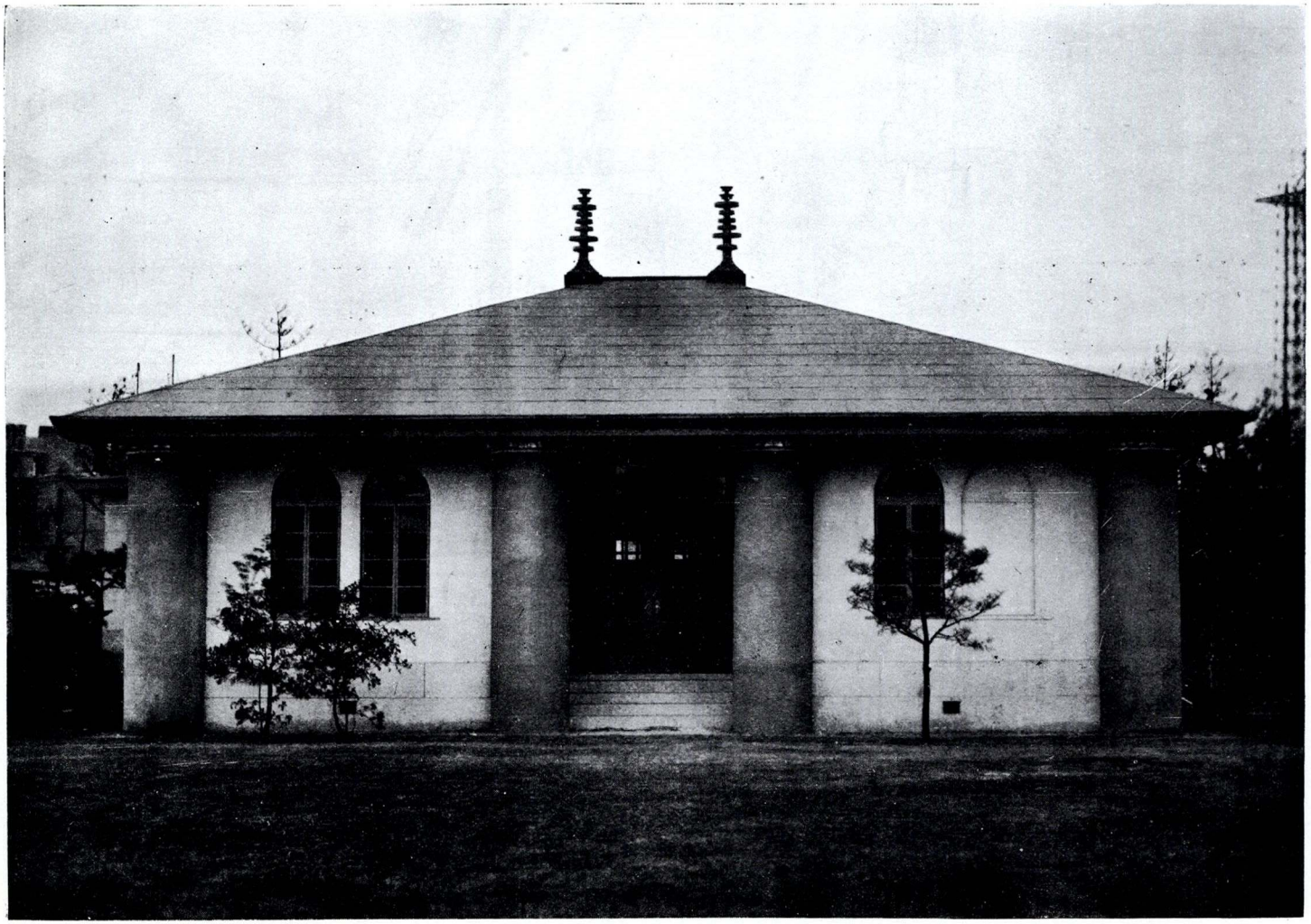
——第二事務所——





電氣大博覽會の建築物

——一部の場會（下）　場劇外野（上）——



電氣大博覽會の建築物

——迎賓館——



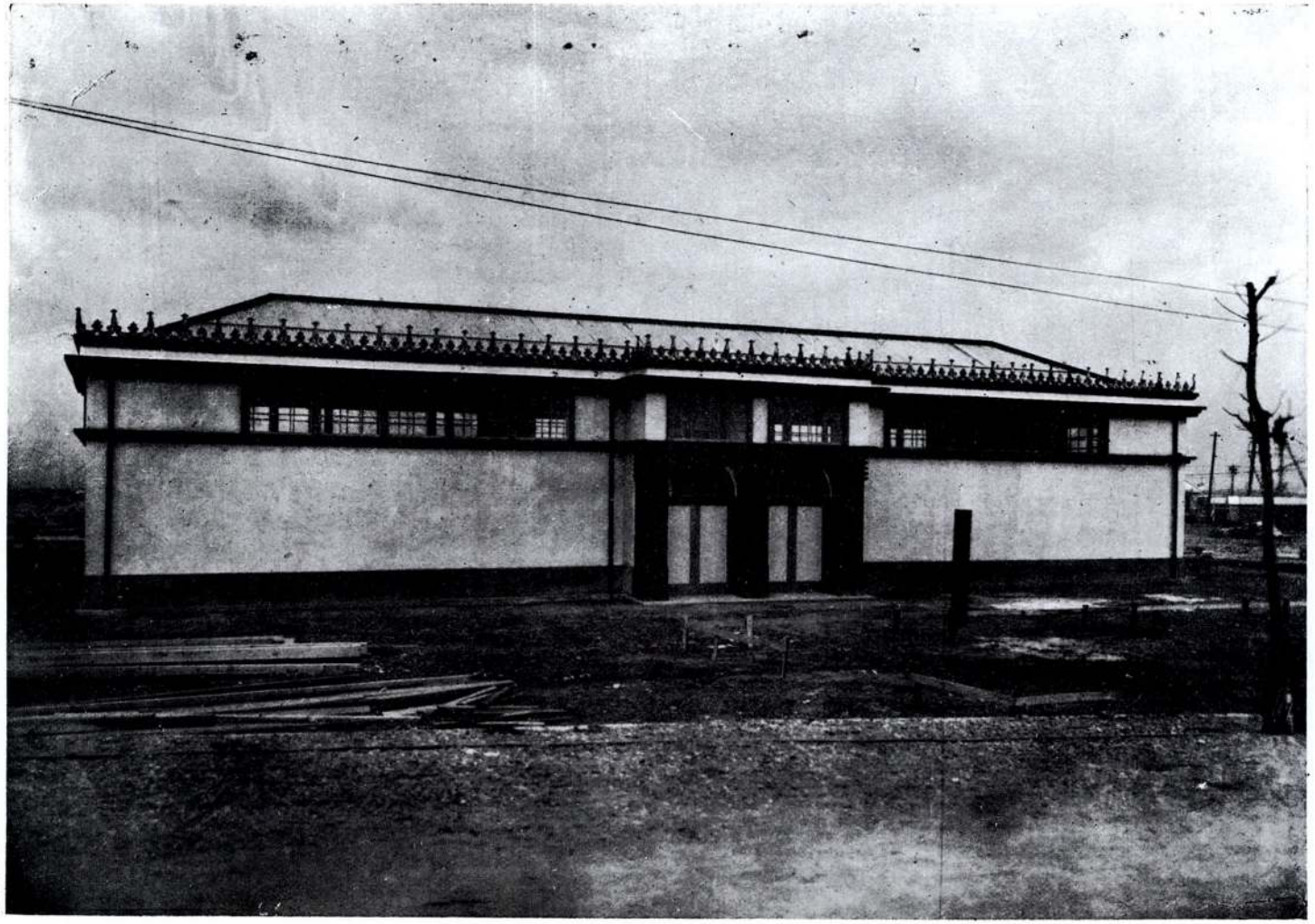
電氣大博覽會の建築物

——外國館——



電氣大博覽會の建築物

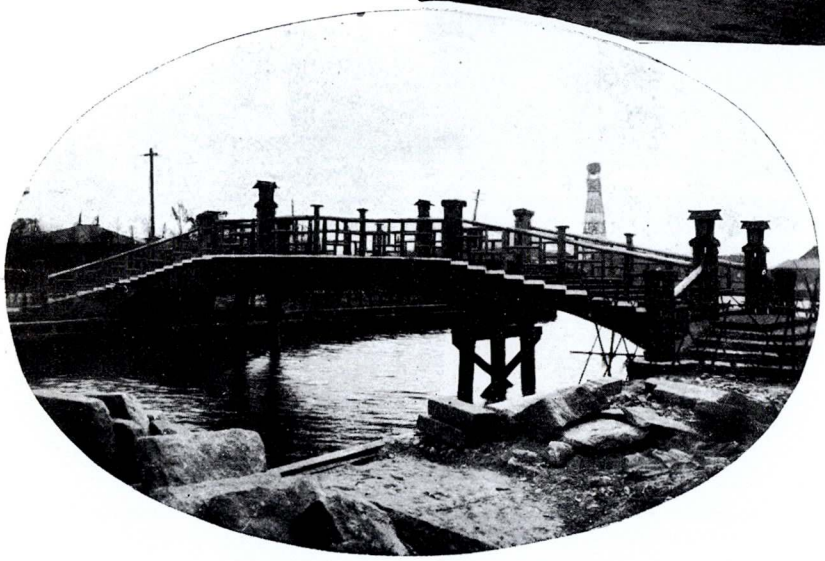
——第一彌生館（活動寫眞館）——



電氣大博覽會の建築物

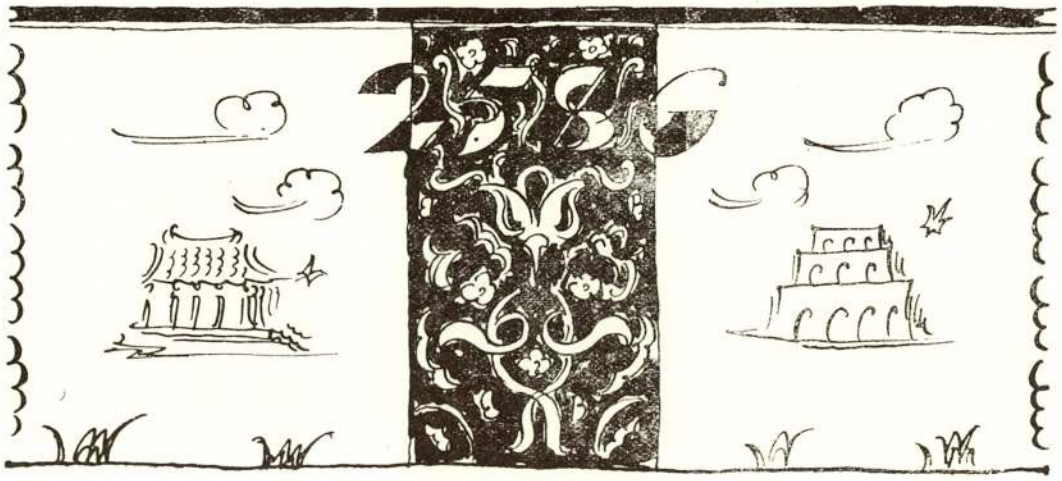
——保健衛生安全館——





電氣大博覽會の建築物

——(上)音樂堂　(下)會場を聯絡する橋——



感情から創造へ

吾々が自己の家を建てんと希望する。長い間これは唯一種の雲の如き敬虔なる冀望として存するかも知れぬ。しかし遂に、殆ど不可抗的に、その家の夢が吾等の心に形をなす。吾等は敷地の見分に出掛ける。建築士に相談する。而してやがて、前よりも非常に明確な委細に亘つて見積が出來る。そこで手段は實際に建設の方向に進められる。堆高き煉瓦と石材とその材料が現場に現はれ初める。そして遂に、曾ては唯心の夢の世界にのみ存したその家が立ち聳へる。恒に、その運動は外部に向ふ。不明確で漠とした「感情」若しくは欲望から、明確瞭然と形をなした「思惟」へ、そして、それから「動作」及び「外部」の世界へ。——併し、感情と思惟が外部の「實在」の世界へ向ふ一般的運動は眞に認められるとするも、思惟と現實的事物の間には、多大な永久的差異が存在すると云はれるかも知れん——心裡にある家のスケッチと石材と灰泥で建てられた現實の家との間には、前者は單なる夢、腦裡の非實驗的な幻影、自身の外の何人も見若しくは感ずる事が能きない。後者は堅牢にして拒み難き事實であり、人間の思惟と動作の間に何ら實證的な分離線の劃かれぬ事を示顯して來た。故に家は人間の腦裡に存在するも、丘の中腹に立つも、全然分離した二物ではない事を實現したいと思ふ。その一つの生産に干與したと同一「創造の藝術」が一つの生産にも干與してゐる——。



共同建築に就いて

渡邊鐵藏

渡邊法學博士は久し振りに我誌のために本編を與へられた。都市研究の權威者たる氏は、帝都復興の一政策たる共同建築に就いて說かれる處、眼を、一線一劃の小世界より都市建築の大局に轉ずることも、建築家の採るべき途なりとせば、蓋し、本編の如き絕好の資料たることに於て、編輯者の感謝する處であるたゞ、本編は校閱を經るの遑なかりしことをお斷りしておく——編輯者

一

大震災後既に二年半にもなり、帝都の復興も漸く緒に就て其經濟上の活動は可なり活氣を呈して來たやうに思ふ、バラックの建ち揃つたのは勿論のことである、一方種々困難な問題に惱まされて居つた區劃整理も追々進捗し、此頃では大部分換地の設計も終つて、多くは各區劃整理地區の委員會をも通過したやうである、偖て區劃整理が段々設計の方面だけでも終つて來れば、愈々換地に建物を移轉さし、次では漸次に本建築をすると云ふ段取になるのである、然るに前に都市計畫委員會で決定された防火地區が先般大震災の經驗に鑑みて更に改正擴張され、既に決定を見て居るのであるが、本建築となれば、是等の防火地區は當然耐火建築を行はねばならぬ而も耐火建築と云へば、多くは鐵筋コンクリートの構造と云ふことにならうと思ふのであるが、さうすれば相當の資本のあるものでなければ、自から建築に取掛かることは出來ぬ、震災後市民の口癖のやうに言つて居る如く、其日の取引の資金にさへ窮して居るのに、又無理算段を爲て、或は借金まで爲てやつとバラックを建てた位であるのに、此上本建築をし殊に鐵筋コンクリートの家を造るやうな金が何處から出て來るかと云ふのも一應尤もな筋合である、併しさう云つてしまへば、何の仕事も出來ない、苦しい中でも色々算段をし、又工夫をして、或は力を協はせれば、出來ぬと思ふたことでも出來るものだ、そこで耐火建築の問題でも其必要を市民が確信すれば、實現の方法は又自から考へ得られると思ふ、個人で此建築の出來るものは今論ずるを要せぬ、問題となるのは

獨力で之を建築する力がないか、若くは共同して建築をしやうとしても、他人との權利關係、資金調達の方法等に付て工夫の付かぬ人の爲に、何等か方法を考へれば可いのである、恐らく目前どれ程苦しい市民でも現狀のバラック生活で其生命財産、營業の安全を保障し得ると考へる者はなからう、誰しも不安ではあるが、せんすべなしと諦めて居るのではなからうかと思ふ、そこで多數集つて文珠の智慧を出すか、又理由のある場合には政府の力を藉りると云ふこともせねばならぬのである、家屋のやうな經費の多く要かるものに從來個人で投資して居つたのが誤りで、將來はどうしても共同出資の方法に依らねばならぬことは明である、德川時代と同じやうな町並家の構造で經濟的活動の益々頻繁重要になる都會、且災害其他の危險が益々增加する都會に於て營業をしやうと云ふのは抑も間違ひである、日本橋區でも、京橋區でも、神田區でも是等の重要な商業區に於ける主な街路は曾に防火の點からの方でなく、安全な永久的の營業所を造ると云ふ意味からでも、從來のやうな二間三間の間口のバラック的木造家屋を廢して、適當な堅固な永久的建築物の成立つに足るだけの敷地のものが合體して、共同の建築をする必要がある、それは其處に住む營業者から云つても當然必要なことであるが、都市の健全な發達の上から云つて、是非さうありたいことである、例へば今度出來る筈の所謂一號線、即ち車坂から芝口に至る二十四間道路の如きは帝都第一等の大通となる所で、恰度大阪の堺筋に當るものと考へるが、換地の案を見ると、此新設道路の兩側に間口一間半乃至三間と云ふ家が甚だ澤山あるのみならず、長屋式の敷地があつたり、又住宅なども澤山ある、斯かる一等道路は元來一等の商業街として發達させねばならぬことは私の屢々論ずる通りであるが、現在のやうな十數坪或は二三十坪位の敷地が多數の借地權者に依て割據されて居ると云ふことであれば、防火建築が不可能なばかりでなく、都市の開發と云ふことは望み難い、從て此種の路線を單に防火線として完成させるばかりでなく、一流の商業街にすると云ふ意味から云つても、小さな借地權者が相集合して、共同で相當な規模の耐火建築を築造し、それを各々が分割占有して、其中に營業をすると云ふ途に出でるの外はないと思ふ、此事は今回の復興都市計畫の主要街路の兩側にある敷地の圖面を見る者は何人と雖即坐に其必要を直感するに相違ないと思ふ、此點から其救濟策としては共同建築の方法に依るのが最も實行的手段であると考へる。

人或はそんな過小敷地が出來るのは區劃整理の方法が惡いからである、區劃整理と云ふのは左樣な小さい敷地の出來ぬやうにするのが其本質ではないか、然るにそんな拙い整理をしながら、後に共同建築を强ひるのは筋が違つて居ると云ふけれども、併ながら今回の區劃整理は眞に理想的の建築敷地を造成すると云ふ意味の區劃整理でなくして、都市計畫路線を完成するに付て諸方で道路の幅員を增す爲に建築敷地に喰込む必要がある、此新な道路敷地を獲得する手段として止むを得ず區劃整理の方法を執つたのである、即ち路幅擴張に要する土地を買收若くは收容の方法に替ふるに、區劃整理の方法に依つたと云ふに過ぎないのであるから、區劃整理が半端なものであつて、成程換地に依て或程度の區劃整理は出來たが、道路に提供する爲に何れの敷地も多少の減少を來して居

るのであるから　全體として敷地が理想的に新式建築を爲すに足るやうになつたと言ひ難いのは無論である、況や數個の敷地を合併すると云ふことも今回の區劃整理の中にはないことであるから、此區劃整理が眞の意味の區劃整理でないことは總ての識者が知つて居なければならぬ筈である、若し又眞に理想的に區劃整理を行ひ、數個の敷地を同時に合併さして單に道路線完成の爲のみならず、理想的敷地を實現さす意味の區劃整理を行ふことを主張したならば、到底今回の區劃整理は實現出來なかつたのみならず、道路計畫の實行さへ不可能に終つたかも知れない、二兎を追ふことを得なかつたのは止むを得ない事情である、そこで現在已に路線擴張の爲の區劃整理の設計を終らんとして、將に一兎を得ることだけは目的を達し得るやうな狀態になつたのであるから、此方が先づ行付けば、他の一兎を得る、即ち換地設計が行はれた後でも猶ほ本建築を行ふに當つて過小であると認められるやうな、若くは使用上不便であると認められるやうな敷地があれば、是等を整理合併して、合理的な建築が行はれるやうな手段を執ることは即ち第二次の問題であつて、今應に其必要を明確に認められたると共に、是が解決をせねばねらぬ焦眉の急に迫られて居るのである、此問題は元來第一段の問題と同時に解決するのを理想とするのであるが、實際の事情の上から止むを得ず之を二段に分けて實行するものであるから、既に第一段の成功が信じられるやうになつた時には事の性質上之を連接して第二段の眞の意味の區劃整理、即ち敷地の合併、共同建築と云ふ問題を解決せねばならぬのである。

二

偖て共同建築をするのにどう云ふ困難の點があるかと云へば、東京は大阪と異つて、所有權者と借地權者が多くの場合に兩立して居る爲に、バラックを鐵筋コンクリートにすれば所謂借地權の性質が自から變はる、其爲め所有權者と借地權者との間に困難な問題がある、又甲乙の權利者は共同建築を希望し、丙丁は希望しない、而も何人が見ても、此四人が共同建築をするのが其四人の利益であるのみならず、都市の發達から見て、必要だと思ふても、丙丁の無理解の爲に反對することもあらう、斯かる場合に共同建築を實現するに付て、法律上其他事實上の困難がある、又共同建築實現後の使用其他權利の分界等に付ても民法其他既存の法律で解決出來ない問題もある、尙又所有權者、借地權者が共同建築を行はんとしても、賃借人即ち現に營業をして居る店子が反對をする場合困難な問題が起る、假に法律の根據に依て不動產權利者が共同建築を行ひ得るとしても、事實借家人が移轉を肯じない場合、假に十數個のバラックを取除いて、一個の共同建築をしやうとする場合、是等の借家人の移轉を强制執行することに付て事實上非常な困難があらう、尙又土地の中には抵當權が設定されて居るものもある、是等の土地も包含して建築せねば、合理的な建築物が出來ぬと云ふ場合、此抵當權のある土地に對して如何なる方法を執るかと言ふことも亦困難な問題である、併ながら結局或種の法規の制定に依て總て法律上の問題が共同建築を實行し、又之を使用するに付て何等の差支ないやうに解決されたとしても、即ち借地人、所有權者、

借家人合意の上で共同建築を行ふことになつたとしても、偖て建築の資金はどうなるか、此問題は初に言つたやうに絶えず市民が口癖のやうに心配して居ることであるが、假にバラック期限が延長されるとしても、矢張り一時に數百萬坪の本建築を行ひ、殊に少くとも數十萬坪の耐火建築を行はんとすれば、巨億の資金を要する、曩に我々が熱心に主張した建築會社は幸に成立して、今や營業を開始して居る、併ながら此會社は我々が主張した資本金二千萬圓、政府借入金一億圓と云ふのが、結局資本金一千萬圓、政府貸付金六千萬圓と云ふことで、辛うじて實現することになつたのであつて、無論ないには勝るに相違ないが、現在では第一回拂込二百五十萬圓政府より二回に二百五十萬圓の貸下があつて、五百萬圓の資金を有するとのことであるが、若し九の內にあるやうな大建築をするとすれば、唯一個の建物の建築費にしか當らぬ譯である、無論將來拂込をなし、且政府の貸付もあり、又追々貸付金の回收もあつて、巧に運轉すれば、相當に効果あるやうに、此金の利用は出來やうが、結局此會社のみの資金で、目下貧弱な市民の蠹中に對して總ての要求を滿し得るだけの建築資金の供給が出來るものでない、そこで右の共同建築の必要を認めて、政府が立案したやうな共同建築組合法案、或は東京市制調査會と建築學會とが聯合して復興局を通じて、政府に參考に供した建築組合法の要項に類するやうなものが成立したとしても、之に物質的の援助を與へるに非ざれば、矢張り實行困難である。

此共同建築組合に關する法規は種々錯雜した權利關係を解決する爲め成立困難であつて、從來多く類例を見ない面倒な法律であることは共同研究をした一人として私も痛感して居る、併し法律關係のことは今こゝに多くを言はぬが、私共は一日も早く此法案が復興局、內務省の熱心なる盡力に依て今期議會に提案され、法律として成立することを熱望する者である、金は兎も角、切めて此法案だけでも出來なければ、共同建築の緒さへ得られぬのである、是は法律案であるから、議會を通過せねば、實現せぬことで、今議會に其機を逸すれば、又一年延びることになる、さすれば恰度復興豫算が度々の政變の爲に延び〳〵になつて、其爲に區劃整理が遲れて、市民が非常な迷惑を被つたと同じやうな苦痛を再び此共同建築に付て嘗めねばならぬと云ふ虞がある、是が私共が先づ第一次に共同建築組合法案の今議會を通過することを切望する所以である。

三

偖て假に此法案が出來たとすれば、組合が成立するのであるが、組合の組織に付てこゝに說くことは避けるけれども、假に組合員に或程度の出資能力があつたとしても、其不動產に關する權利以外に建築資金を提供する力は微弱であると認めねばならぬのであるから、假令耐火建築に對する政府の補助金はあつても、別に建築資金の或部分或は出來れば、大部分に對して相當の資金の融通方法を公共の力に依て講ずる必要があらうと思ふ、復興建築助成株式會社が此組合に貸付けることは當然のことゝ思ふが、併し會社が若し安全に回收の速いものに貸すとなれば、却て個人の相當な信用ある資本家營業者に貸すと云ふことになつて、眞に公共の力を藉りなけ

れば、耐火建築を實現さす力を有たない、即ち共同建築を是非とも行はねばならぬと云ふものに對する金融の途が困難になるやうな虞もある、そこで出來得ることならば、建築會社が寧ろ斯かる法案の基礎に依り成立した共同建築組合に對して優先して成べく長期の年賦償還の條件で貸付をすることを希望せざるを得ない、併ながら此資金とて限りがあるのであるから、私は豫々言ふ通り、政府は今回の復興の計畫に付て道路の完成の爲に六億の金を提供して、耐火建築の實行に付て、僅に二千萬圓しか提供しないのは片手落と思ふから、之にも二億位の支出をするのが當然であると考へて居る次第である、それは一個の私論ではあるが、識者の贊成を得べき合理的の主張を考へて居る譯であるし、殊に震災直後に出來た帝都復興評議會に於て復興當局が建築助成費として少くとも一億圓以上の金を支出すべしと云ふ決議が成立して居る、當時私は片岡安氏と共に特別委員の一人として此希望條件の提出に干與したのであるが、是は希望條件であつて、政府は必ずしも實行する責任はないと云ふかも知れぬが、あのやうな有力な機關に於て愼重審議の結果議決したことであれば、政府も或程度まで之を實現する義務はあらうと思ふ、而もあの一億圓は補助金と云ふ意味であつた、併し私共は今は補助金でなくとも可しい、貸付金で澤山だと思ふし、又さうすれば更に多くの金額を政府は支出しても可い譯であるが、切めて二億圓位の貸付は此際政府が厭ふべき理由はないと思ふ、又其財源も容易に見出し得ることは私は確信して居る、さう云ふ次第であるから、政府は彼の復興建築助成會社に對して市を通じて六千萬圓の貸付をする際に於て、將來必要があれば又適當と認めれば、更に增額するかも知れぬと云つて居るが此言を實行する意味から云つても、私は寧ろ建築會社に貸さるゝも可いが、直接に此共同建築組合に對して更に一億數千萬圓の貸付をすると云ふ方針を採つて、一方共同建築組合法案の成立に依て共同建築實現の基礎を造ると共に、他方此貸付金に依て右の基礎の上に共同建築が堂々として實現することに助力せらるゝやうに希望せざるを得ないのである。

若菜生ふる春の野守にわれなり
てうき世を人につみ知らせばや



地方高等女學校に於ける『住』の教育に就いて

佐藤功一

地方の高等女學校に家事と云ふ教科目があつて、其中に住の一項目がある、而も其住の教育が甚だ當を得て居ないやうに思はれる、今一々其内容をこゝに議論することは避けるけれども、例へば何處の女學校でも此科目の宿題として、住宅の間取などをよく書かせるのであるが、私はこんなことは高等女學校の學生に教へるものとしては左程重いものではなく他にもつと重要なことがあるであらうと思ふ、或人は主婦は住宅を司る者であるから、住宅の建築の知識がなければならぬと云ふやうなことを言ふて居るけれども、そんなことは嘘だ、若し果してさうであるならば、ステーションの驛長はステーションの建築のことを知らなければならぬし、學校の先生は學校の建築のことを知らなければならぬ、結局人間が此世に生活するには誰も彼も皆總ての學問に通じなければならぬと云ふことになるが、汽車に乗つて行くには汽車のヒコモテイーヴのことを知つて居なければならぬと云ふやうなことは可怪しいではないか、仍ち是は廣い意味に於ける住と云ふことゝ、住宅の建築と云ふことを混同して居る所から來る謬見である、高等女學校の學生には間取や構造のことを教へるよりも、寧ろ如何に住宅が腐朽して居るか其檢分をすべきことや、或は疊替は幾らで出來るものであるかと云ふやうなことを教へるべきものであらうと思ふ、所が或一部の賢い先生達は私の言ふやうな教育方法を採つて居るが、一般にさうは行つて居ないやうに思はれる、文部省で作つた教授要目と云ふものでは、先生の自由意志に依てどう云ふ風にでも決められるやうに出來て居るから、今文部省の教授要目に付ては論じないけれども、教へる人達がどうも近來のハイカラ雜誌に感染れて、殊更餘計なことを教へて居るやうに思ふ、尤も人に五のことをさせやうとするには十の教育をしなければなら

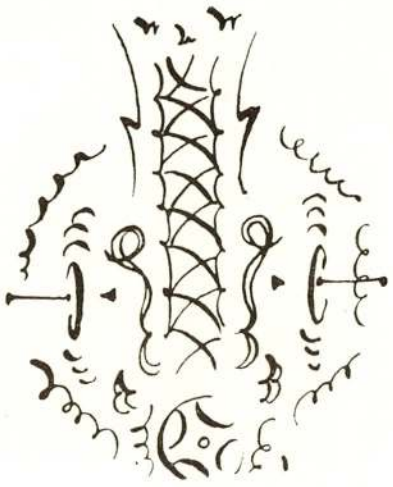
ぬと云ふやうな譯で、唯現實に間に合ふやうなことばかり教へたのでは可けないかも知れないが、併し實際主婦として生活するのに懸け隔つたやうなことを教へるのはどうであらうか、私は寧ろ住宅の教育をすると云ふ其言葉すらも厭だ、衣食住の住の教育をすると云ふことに言ひたいのである。

住の教育とはどんなことを意味するか、之を廣く見れば、先づ歴史的方面から觀察して、家族及び私有財産の起源とか或は文化の幼稚なる時代から今日に至るまでの各民族の住の變遷とか、從て智的環境と住の法式との關係、村の發生、都市の發達、廣くは民族移動の問題にも及ぶであらうし、又實際問題としては住宅の建築、或は一般住宅に關する知識は勿論、所謂住宅政策、借家の問題から土地家屋の買入に關する事項、火災及び地震などに對する處理法、或は室内庭園の裝飾、暖房、換氣、採光、照明、下水等に關する知識、或は消毒及び掃除、家屋家具調度の保存修理と云ふやうなことが其中に入るべきものと思ふ、併し私は斯う云ふことを悉く高等女學校で教へなと云ふのではない、唯廣く住の教育はどう云ふものかと云つた場合に私は斯う云ふのである

要するに住宅建築と云ふものは住の教育の一小部分を成すに過ぎないのであつて、私は高等女學校の住の教育としては以上のやうな事柄を目安に置いて、もつと適切な、而して住に關する直接の問題でなくとも、中等學校の婦人として相當に住に關する頭腦を養成し得べき問題を教へたらばどうであらうかと思ふ。

巴里工藝博と日本建築

昨年の五月から半年に亘りバリーのセーヌ河に開かれた萬國工藝博覽會には我商工省でも一方ならぬ力瘤を入れ出品も各方面から集められたがその授賞式は昨年十月二十六日大統領ヅーメルグ氏臨席の下に巴里グランパレで行はれ其の結果は去月佐々木商工書記官外一行の歸朝に依つて知ることが出來た、愉快なのは萬國出品者が覗ひの的となつて居た最高オールコンクール賞が日本建築に與へられたことである、此のオールコンクール賞は超審査名譽賞ともいふべき物で受賞者は出品者は二階三間階下六間で別に茶室とギヤラリーがある、建築費や滯在費を合せて八萬八千五百圓、荷造其他雜費四千五百圓かゝつた、兎も角も純日本式の家屋がコンクリートの四角ばつた建築物の中に建てられたのだから非常な評判で態々獨逸あたりから建築技師が多數參觀に來た殊に感興を深めたらしいのは婦人室で用箪笥から姿見、調度一切を整へ寢臺の上には五段の雛を飾り羽子板を並べ中央には縞縮緬の座布團を敷いたので大變珍らしく婦人達は皆羨ましさうにこれを眺めたそれから庭園は蘆川といふ職人がやつたのであるが折角携へて行つた樹木は過半枯れてしまひ僅に殘つたものと佛國の樹木で日本趣味のものを選んだところこれが亦非常な評判であつたが蘆川氏は姓名を書出してなかつた爲め「唯日本庭園師」として金杯を授與された、尚ほ此の建物は玄關から座敷居間附きに二分して一は瑞典のストツクホルムへ一は伊太利ミランの見本市へ賣約され同市に異彩を添へることゝなつた。



都市計畫事業は何故進まないか

西村健吉

一

大阪市に都市計畫部の前身である市區改正部の設けられたのは大正七年六月のことである、數へてみるともう足掛け九年になる。大阪市區改正設計が大阪市區改正委員會で議決されたのは大正八年十二月のことであるからこれまた滿六年の時日を經過した、七ヶ年繼續事業として一億四千萬圓の豫算が樹てられたのは大正十年三月であつた、これまた繰つてみると六年前のことである尤も關東大震火災の經驗によつて一部設計及事業に更正が行へられたとはいへ順調に進めばもう大阪の都市計畫も大分進んで來て居らなければならぬ頃である

然るに事實はと見るとなか〳〵もつて進んで居らない。更正計畫によつて行はる初年度に於て既に事業は一年繰延べの餘儀ないことが傳へられて居る。しかして都市計畫當局者は頻りに都市計畫の宣傳を行ひ都市計畫に對する市民の理解を要求して居る。果して大阪の都市計畫が市民の理解を缺くために斯く遲延を重ねて居るのであらうか、些か疑ひなきを得ない次第である。

或は都市計畫事業に對する市民の理解に徹底を缺くものがあるかも知れない、二百萬市民のことである、もとより蒙昧の徒のあることは否まれない。しかしながらそれより以上に理解を缺き怠慢の責を負はなければならぬものは斯くいふ都市計畫當局者ではないか。事業執行不能の責はこれを不能ならしめたものゝ負ふべきものである、大阪市民が果して事業の執行を不能ならしめたものであらうか。もし關係當局者の誤算と怠慢によつて事業を遲延し、執行を不能ならしめたとすればその責は正に都市計畫關係當局に歸すべきものでないか。

大阪市に於ける都市計畫事業の現在を剖檢しその理非の何れにあるかを檢するに先達つて考へなければならぬ問題は大

阪市に於ける都市計畫が何人の發議によつたものであるかである、もし市民の發議によつて行はるゝに至つたものとすれば誰か果して市民に理解なしと云へやう。我等はこゝに靜かに過去を振り返つて見ねばならぬ。

二

大阪市に於て都市計畫――市區改正――の問題が起つたのは明治十九年十二月大阪府區部會が時の知事建野郷三氏に市區改正の建議をなしたのをもつて嚆矢とする。これは大阪の都市計畫を論ずる人々の夙に知るところであつて今更らしく述ぶるまでもないことである。しかしながらこの事實こそ大阪市民が當時既に計畫事業に對し透徹せる理解を有して居つた有力なる證左ではないか。

尤も財政上の都合や何かでこれは實現に至らなかつたか明治廿年一月には市區改正法案取調委員が設けられて一等の十五間道路から五等道路までの設計をして居る、然も知事に提出された區部會建議の要旨は『蒸汽機關を使用して物品を製造する危險工場を一定の場所に移轉せしめて民族の安寧を保ち、市内の主要道路を擴築して車馬の交通に支障なからしめやう』といふのであつた。

この府部會の建議は即ち當時に於ける大阪市民の意思を代表したものであつた、當時の市民は都市計畫の必要を感じ府區部會を通じてその意思を表明したのであつた　當時に於て時期尚早を唱ふる少數反對者のあつたことは勿論である、しかしこの計畫が實現せなかつたことは尚早論者の反對のためといふよりは寧ろ當時の府財政がこの大事業を敢行せしめ得なかつたのである。ついで明治三十年に接續町村の市域編入を行ふと翌年山口半六博士を聘して市區改正の調査を遂げたがこれもものにはならなかつた、しかし市民の市區改正を要求する聲はいよ〳〵切實となり明治四十四年には市會の建議となつて現はれた、爾來大阪市會は年々上京委員を派し或は市都選出の代議士を動かし政府をして大正六年東京市區改正條例を準用する法律案を議會に提出するに至らしめたのである。斯くして實現したのが大阪の都市計畫である、これをしも何人か市民に理解なしといひ自覺なしといひ得るであらうか。大阪市に都市計畫が行はるに至つたのであつてもし市民に理解なしとし自覺なしとしたならば今日大阪に都市計畫は或は見なかつたかも知れない、また都市計畫法によつて市が事業の執行を餘儀なくされて居つたかも知れないが市民の要求によつて行はれるものでないだけに市民の理解を缺くものが必ずや今日より以上に多いことを予想するに難くないのである。

幸にして大阪の都市計畫は市民の熱心なる運動と要求によつて實現の緒についたものであるだけに多數市民の理解と市會の諒解を得て居る點に於て敢て他に讓らないものなのであると云ひ得る。

三

市民が理解を有するとしてももとより多數市民のことである、そこに反逆者のあることは免れない、都市計畫事業のために市民の悉くが唯々諾々として店舗住宅を立退き土地を提供することは理想である、しかしながらそれは期すべくして

容易に得難き理想である、法律を制定して違犯者のないことを豫想するのは無理である。國民の悉くが法律を遵奉することは法治國の理想である、しかしながら事實は容易にこの理想に到達せない、多數の巡査を見よ、多數の刑務所を見よ、誰かその存在を欲するものがあらう。

都市計畫事業に於てもそうである、少數の反逆者あるがために多數の市民が迷惑を被ることは理解ある市民にとつて堪へ難き迷惑であり忍び難き苦痛である、けれどもこれあるがために市民に理解なしとし市民に自覺なしと斷ぜらるゝことは市民にとつて更に大なる迷惑であると同時に大なる侮辱である。市民の大多數は都市計畫なき都市の不利不便を是認し都市計畫の實施を要求し來つたのである、隨つて事業の執行に必然的に伴ふ犧牲のあることもまた是認して居るものとせなければならぬ、勿論少數の例外は免れないにしても大多數のものは既に承知して居るものとして差支ない、然も爾かく事業の延滯を來す所以のものはこの少數例外者の阻止によるか或はまた關係當局者の怠慢によるかこの二者をおいて他にない筈である。

路上傳ふるところによると市當局者は政府の起債遷延による資金調達難をもつて工事延滯の口實とし、政府當局者は資金の貯積と工事の停頓に籍口して起債認可遷延の辨として居る、何れが眞か僞か正すに遑ないが兎も角少數なる反逆者によつて事業の進捗が阻止されて居らない、また居るにしてもそれが事業停滯の大なる因をなすものでないことだけは關係當局者の釋明によつて闡明さるゝところである。

さればその責何れの當局にあるやこれを知らずと雖も尠くも都市計畫關係當局こそ市民より抗議を持込まるべきものであつて、更々市民はこれからの當局者より都市計畫の必要を說かるべきものでも、また無理解を非難さるべきものでない

四

誰がなんと云つても市の都市計畫事業が尠くも一ケ年に近く遲れて居ることは年度割をこゝに示すまでもなく明白な事實である、市の都市計畫當局と雖も或程度までこの事實を是認して居るのであるから此場合年度を引證し事業進行の程度を示す必要は更にあるまい。然らば何が故にかく事業の進行が遲れて居るかとの質問に市當局は答へて起債認可の遲延をもつてして居る。起債の認可が遲れに遲れて居ることは明かな事實である、大正十三年度中に認可さるべき六百六十萬圓の起債が十四年度も漸く十二月に入つて認可さるゝに至つたが如き、また大正十四年度內に認可さるべき千六百余萬圓の起債を政府當局が認可せない結果事業を進捗せしめ得ざるが如き都市計畫事業の進行を妨げる最も甚しきものと云はねばならぬ。都市計畫は云ふまでもなく國の事業である、その事業年度割は內閣の告示によつて決定されたものである、然るに政府當局は無責任にも事業年度割を市民に公示しながら事業の遂行に必要なる資金の調達を計さず自ら事業年度割を破壞する擧に出でつゝあることは全く都市計畫に理解なきものゝする暴擧であると云ふべきである。

募債認可遲延の理由が非募債主義にありとするならば都市計畫の眞意義を知らざるも甚だしきものである、都市計畫事業は決して不急の土木事業ではない、關東大震災の敎訓に見

るも大阪市にとつては一日を等閑に附すべからざる焦眉の問題である市民の生命財産を保護するために政府のとるべき最も緊急なる施設である決して地方に於ける道路問題等に比すべき不急の土木事業ではない、市民の生命財産を保護すると併せて市の産業的地位を向上すべき重要施設なのである。また起債認可延期の理由を事業の停滞にありと云ふならば政府當局は年度割に基いて事業を進行せしむべく市當局を督勵し事業の遂行に必要なる資金の調達を許すの方策に出でないのであらうか。常に事業を指導監督することなくして事業の停滯を理由に資金の起債を許さざるか如きは畢竟政府當局に於て事業上の誠意を缺くがために外ならない。こゝに於てか我政府當局は都市計畫に對し透徹せる理解を缺くといふもまた辨解の辭なきものと思ふ。

五

都市計畫法を立法せる政府當局の態度既に然り。しかして市民の要求と政府の立法に依て都市計畫を立案するに至つた市當局にどれ程の理解があらう。尤も多數のなかには都市計畫事業に大なる抱負をもつて從事して居る人々もあらうが今日までの實績に徵すると遺憾ながら未だ努力の跡を認むることが出來ない、また都市計畫事業が市民の切實なる要求によつて生れ、多大の負擔を辭せずして行はるゝところの特殊事業であるといふ理解が缺けて居りはせないかと疑はれる。

都市計畫は市民全體の利益のためである、と同時に計畫路線に當る不動産所有者には更に大なる利益を齎らすものである。しかしながらそれは永き將來に亘つてのことであつて現實の問題として計畫路線沿道居住者の迷惑と損害は決して尠いものではない、立退を余儀なくさるゝものは更のことであるが立退をせないまでも工事期間殆んど營業を休止せしめらるゝが如き狀態にある沿道商店の迷惑と苦痛は甚大なものと想像される。然るにそうしたことに餘りに都市計畫當局は同情がなさ過ぎはせないか。西横堀線の街路擴張工事の如きその最も甚だしきものである。曠野に道をつくるが如き悠々たるあの作業がドレだけ沿道居住者に迷惑を與へ、市民に現實の、都市計畫を懷惡せしめたか知れないのである。正にこれ市民をして都市計畫を懷はしむるに至つた有力なる惡宣傳とも云ふべきものであつた。これをしも都市計畫に理解ある技術當局といひ得るであらうか。

市都市計畫當局の負ふべき無理解の責はそれのみでない、技術方面に違算あり誤算ある如く、用地買收其他の事務方面に於ても著しく停滯の氣味である。內務當局の辨明する如くであれば市の用地買收は遲々として進まずこれがために七分乃至八分の利息を拂つて起債された千數百萬圓の資金が徒らに低利で銀行に預入されて居るとのことである。また一說には殆んど千萬圓に近い資金が定期預金として銀行に預入されて居るとも傳へられるから兎も角市當局が相當の資金を擁しながら買收手續に豫期以上の日時を要し都市計畫事業の進捗を遲らしめて居ることは或程度まで事實である、無能のためか怠慢のためか、何れにしても既に計畫路線に決定し立退きを用意し、準備しつゝある住民にとつて迷惑至極な話である擴張路線に面した家屋の家主は將來の改修を豫想し居住者の要求する小修繕に應せないのを常とする。これがために事業

の遅れることから迷惑を感ずるのは誰よりも沿道居住民である是らの人々の不平が轉ては都市計畫に對する呪詛となり怨嗟の聲と化すのである。何人が彼等をして嗟嘆せしむるに至つたか、これまた都市計畫當局者の深く考慮すべき問題ではないか。

六

政府當局並に市都計畫當局の無理解が都市計畫事業を、進行難に陷らしめたことは既に述べた通りであるが、更にその責の一を分たねばならぬものに府當局がある。もとより市内の都市計畫は市長が執行するものであるから府知事のこれに干與することは市長若しくは起債認可權を有する政府當局の如く密接なるものではないが、交通警察權を掌握し河川法による河川管理者として直接事業上に關係を有する點に於て輕視することの出來ない地位にある。その知事が市民の交通保全を圖るために今日までに周到なる注意を拂ひ來つたか。これ市民か問はんと欲するところである。

府當局が自ら進んで事業となさないまでも、市都計畫事業を容易ならしむるために積極的にこれに聲援を與ふることは當然の措置であるのみならずまた市民の望んで止まないところである。然るに現はれた結果は遺憾にも市民の期待を裏切るものが多いのである。最近傳へられたる千代崎橋架換工事中止命令の如きその最も露骨なるものの一つである。府當局は手續の完了を待たずに工事に着手した市當局の行爲を不當とし工事の中止を命じたといふのであるが事實とすれば眞に奇怪な事實である。交通保全の見地からすれば橋齡の老いたるものは命令を發してゞも架換せしめなければならぬ筈である、然も千代崎橋の改築は内閣の告示せる事業年度割に明々白々と大正十四年度と記されて居る。街路擴張と異つて橋梁架換の如きは危險を未然に防止する上に架換の必要を認めるときは一日も急施を要する性質のものである、然るにその適法の監督權を行使せずに手續までの不法なる監督權を行使して作業を中止せしめたが如きは假りに都市計畫事業を助長する精神より出でたものとするも現はれた行爲は正に都市計畫事業に對する妨害である。これは單にその一例であつて所謂審査に名を藉り多數の日子を手續に費さしめ事業を徒らに遷延せしむるの事例は決して尠くない。大阪市に二重監督の撤廢が唱道され特別市制が主張さるゝもこれあるがためであるが都市計畫事業の如き國の事業にしてまた市民の事業に對して尚斯の如き頑迷なる措置に出づることはこれ畢竟府當局に理解を缺くがために外ならないと考へる。

かく擧げて來ると市民よりは遙かに都市計畫關係當局の方が無理解であることが判る。斯くも今日までに現はれたところによると當局の方に無理解なる行爲が多かつたのである。しかして市民の理解が進むに伴つて當局のこの無理解なる行動はいよ〳〵事業を施行難に陷らしむるのである。『よらしむべく、しらしむべからず式』の古い型の遣方に市民が滿足せなくなつてる時代に關係當局者の頭腦が時代遲れで時勢に順應し得ないことゝ都市計畫事業そのものが新らしい事業であるがために事業上の經驗に乏しいことが今日の結果を招いたのではなからうと思ふ。こゝに於て今まで『無理解』を冠されて居つた市民はこれを關係當局に返上し更に彼等の『無理解』を自覺せしめるとゝもに關係當局者の二省三省を求めねばならないのである。（大正一五・二・二八）

建築踏青鈔（其の一）

廣岡峰太郎

踏青

青き踏む川鳴り近き堤哉　放浪

痕跡

自分は、時折りいまでも自分の右の肩先に手を觸れるとき吃驚するやうな事がある。といふのは五年前自分を苦しめた病氣との闘爭の跡があるからです。注射の鍼の跡だ。

注射といふ奴も、日日に二三本宛ものゝ、半年も續けばいくら頑固な自分の身體だつても鍼だこが出來る病氣と注射との結晶が鍼だこになつて、五年後の今でも自分を吃驚させるに充分だ。

何といふ怨靈だらう。何といふ圖太さだらう。自分の右肩の注射の鍼だこに手を觸れて吃驚するにつけても思ふのは惡と惡を制肘する力だ、苦しめ虐げようとする力と、樂しめ蘇らせようとする力だ。惡魔と神とについてだ。

凡そ世の建築家に於ても、既にして構築されたると、されざるとを問はず自分の創作にかゝる建築物の上に、自分が注射の鍼だこに觸れた場合と同じような經驗を持たれないであらうか一つの建築の上に於て、美と醜との闘爭を、闘爭の痕跡を目前に、無慘にも曝露さるゝ程いたましき事は、他に類例ばすくないであらう。

自分は——振返つて見て、自分自身の體質の病的に出來上かつてゐるのを感じる。そして必然的に、今にして思ふと、斯くあらなければならなかつた自分といふ風にも思はれるし、何が故に、斯くあるべかりし我なりしかとも思はれて來るのである

何故、自分は病氣の怨靈の、抗爭の跡を一生涯肩先に負つて行かなければならないのか。何故、自分の肉體の最後迄で、神と惡魔との像を、實感的に背負はされてゐなければならない樣に運命づけられたのかとも思ふのである、この自分の思ひは勿論下らない一私人の思ひであるには違ひがないが、現代の建築家達の、建築物の上にもかゝる思ひは持たれないであらうか。かゝる惱みはないであらうか。

——痕跡、痕跡、痕跡だ。

病苦から自分は、まぬがれ度いばかりに、一度ならず二度、三度までも、自殺の決心をさせたこの病苦の痕跡だ。

廣告塔の一例

——街頭の廣告塔は、明暗を舖道に繪る。

明暗の、明必ずしも美ならず暗必ずしも醜ならず明暗の上に恬然として尙且、剝落したペンキと、ぼろぼろの鐵板と、氣味な鐵骨の露骨さとが印象に殘る街頭の美醜を超へた痕跡である。何といふ痕跡の、これは憶面のなさ。

黎明

黎明の感じは、ほのほのしさにある。

深冬に入つて愈々そんな氣持ちに浸り得るのである。寒氣凜烈たる裏山の樹間に、東天の金色光に映ゆるに及びては、予は臥床の中にあつて、硝子戸に結晶したる霜の帳を通して、黎明に對して、感慨をやるのである

庭の橙の實がかゞやき、矮鷄が切株に上りて刻を告ぐるに至りて予の眼はすつかり覺めきつて終ふのである。

又

——黎明のほのほのしさは、君の建築詩情を耕し、君の現在の建築に對する幻滅感を、跡片もなく消え失せしめるところの魔法使ひです。

——君の敏感な神經は、數限りなく大氣の中に無數に擴がりゆくところの、アミーバーかも知れません。

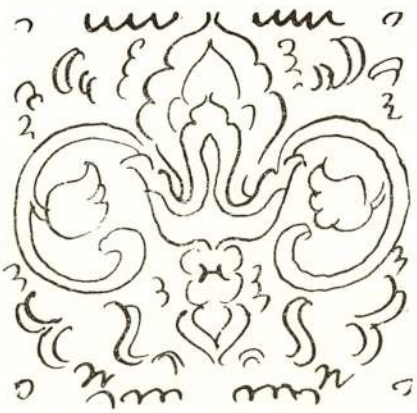
——あゝ、この黎明のほのほのしさの中に、息づくものゝ生命を、哀れまなければならないところの君は建築家です。

暗黒都市

大阪の市中も、三百年も昔の事ならいざ知らず、現代の大阪市内で夜になると追剝ぎなんかが出るといへば、いつた者が狂人扱ひされるであらう。實にそれほど大阪の街は開けたのである。そして繁華だ。

勿論、白晝公然と市人を、おびやかすが如き犯行は、屢々繰返へさるゝのであるが、深夜人通りなき街の暗がりから躍り出て、行人を追剝する樣な人間などが飛び出す樣にも思はれない都市的施設の行届いた大都市ではあるが、追々と市中に於ても大建築物の出現が在來の住家の分布狀態をして稠密でなくならしめて行く如な傾向のある今日に際會しては萬更らこんなことも考へられない譯でも無からうと、いふのは、近頃ろ盛んに建築さるゝ處の大建築物の附近に於ける街路照明の不備な點を擧げたいが爲である。

一例ではあるが、內容外觀共に堂々たる、ビルデイングが出來ても、そのビルデイングが直面する街路に迄で、照明方法、設備の設備が細心の注意を拂はれて行はれてゐる處は少ないであらう申し譯に、建物外部の照明設備は施工されてあつても、點燈夫が夕方になると、街の戶毎戶毎の軒燈を灯し歩いた、ランプの街頭時代より少しも進んでゐない如な現在の照明方法、設備の脊弱さではないか。



建築に於ける容貌以上のもの

永尾篤次郎

1

美が單に表皮の深さであるに過ぎないとの觀念は、その根底を一つの大いなる誤謬の上に立つるものである。

元來、その容貌を以つてそのものゝ價値の一切を斷定することは、如何なる種類のものに於いても困難であり、危險である。しばしば、容貌はその本然の價値を空しく誇張するだけではなく、僞り、傷け、また誤り傳へやうとする。

容貌が容貌そのものゝうちにその目的の一切をもつ場合があり得るとすれば、その容貌はそれでもつてすでに一切の問題を解決したものであつて、論議の餘地はこゝにない。しかも、その容貌がそのものゝ本然の價値を正しく誤りなく示現しなければならぬ時、その容貌はそのものゝ本然の價値に對しては最も密接にして重要なる位置を占むべきものである。

藝術に於ける容貌とは即ちその表現の謂である。考慮されなければならないことは、藝術に於けるその容貌の正しき位置である。

藝術が表現であるとは、すでにあまりにもありふれた常識である。藝術の一切は事實表現に初まつて表現に終るが如く見える。從つて、藝術論はその表現論であり、美學はその表現學であるかのやうに思はれ勝ちである。議論としてはすでに辯爭の餘地なきまで、この主張は正に堂々たるものである。しかも、救ふべからざる錯覺は應々にしてこゝに育まれる。表現のための表現論はその一つである。表現を表面の單なる技巧を意味するものと誤信し、美がその表面の快感のみに依るものを盲斷しやうとするが如き傾向はこの錯覺の生ぜしむるものである。古來幾多の藝術家もこの錯覺の捕虜とならないためには相當の努力を要し、幾多の美學者もこの錯覺から自由でをらんがためには、しばしば熟慮を重ねなければならなかつたのである。

藝術の容貌とは果して何ものであるかゝゝんで、建築の容貌とは如何なるものか。建築の容貌以上のものとは果して何か。

2

新聞記者の觀た大阪の建物

大大阪市の建築が最近むやみと脊延びごつこをして今では五階以上、六階以上といつた高層建築がウント增えてきたが、建築界に權威をもつ某技術家は、これら大大阪市の建築を「樣式」の上からみて次ぎのやうな遠慮のない批評を試みた大阪市でズッと以前にできた高層建築は大抵みなイギリス風の復興式のものばかりだつた。中央公會堂などはその代表建築であるがその他赤煉瓦を化粧したものはいづれもみなこの樣式を出來るだけ多分にとり入れたものとみてよいこれは一時大阪を根城にしてゐた故辰野博士の勢力を物語るものであらう。その後若い技術者間に試みられたのがドイツ式の模倣で大阪でも遞信省關係の建物は殆どすべてこれによつてゐる。ところが最近になりアメリカ風の建築が勃興してきたこれは單に樣式からではなく建築上すべての設備を科學的にしたいといふ實際上の要求から起こつたものであるが、それも一時の現象で今はすつかり行方がちがつてこの頃出來る建築にはこれと名づくべき樣式は全くなくなりすべて資本主義から來る一種の嗜みに囚はれる事になつてしまつた試みに今までに出來上つた大建築についていふと堂ビルはアメリカ風をまねた樣式のなかにドイツ式の裝飾をとり入れてをり、大阪ビルも同樣アメリカ風の樣式をとつたが細かい部分なり設備上のすべての調子には中世紀のスパニッシュをとり入れ、うまく時代の矛盾を醇化してゐるところに一種の特色が見出される。大阪市廳は純然たるルネサンス

藝術を偉大ならしむる眞の性質を論じて、ラスキンが創意、誠實、美を愛すること等をあげ、附加して、高尙な題目の選擇といふ一條に論及し、基督を畫いたレオナルドをこの故に第一流とし、アテネ派の學者を畫いたラファエヲをこの故に第二流と論評したことは、正に彼の藝術上の錯覺を表白するものである。彼は常に最大なる觀念を包含する藝術が最大なる藝術であるとの觀念を抱いてゐたので、その主張に熱心なるあまり、この子供らしき誤謬にひとたびはおちたのであつたが、やがて彼はこの錯覺を打ちこはすにあまる明徹なる語調でもつて、『高い藝術と低い藝術との差は、はつきり指定の能きる描字の方法や、表現の體裁や、題材の選擇にあるのではなく、藝術家が達しやうとして努力する目的の高さに全然據るのである。』と主張した。『例へば、畫家が放膽に畫くから、細心に描くからに依らず、薔薇の花瓣を畫かうが、絶壁の裂目を描かうが、問題ではない。唯如何なる手段を以つてするにせよ、貴い道理を說明し、貴い情緖を喚起するならば偉大であり、唯その描く間常に愛と賞讚との念が彼を離れず、永久に彼の作を離れないならばいゝのである。要は崇高な目的のためであつたらいゝのである。』

この主張はまことに正當であつて、些も論難さるべき空隙を含んでゐない。この觀念は今やこれ以上學的にも常識的にもなし得ないほど一般的なものである。唯留意さるべきはこゝに主張されてゐる貴い情緖なるものが、決して、單なる快感のみを意味してはならないことである藝術はもともと感覺のものである。その目的が新しき感覺を作り出だすことにあるのは、言ふを待たないところである。從つて、古來藝術論上に於いて、その快感の問題ほど多への論者の論爭の的となつたものはない。美の相の本然が果して快感であるか否かが、やかましく論議されなかつた時代はかつてない。今日に於いては、美と快感とはすでに離すべからざる關係にあるものゝ如く信じられつゝある。唯ひいて、藝術の目的が快感を惹起することにのみかゝつてゐるらしく思推することは甚だ危い。美はたしかに快感ではあるが、快感のすべてが美であるとの斷定を躊はなければならぬ場合にしばしば私たちは遭遇するのである。從つて、藝術が快感のみを目的としないもの

式住友總本店のは強ひていへば近代復興式だが、樣式はといふと、これといふ色どなりがく、すべての樣式を「集大成」としたものとみるのが適當かも知れない。たゞこれら多くの建築のなかで一ばん彩どりの明るいのは府立圖書館がまじりつ氣のないルツサンス式であるのと大阪倶樂部がアメリカ風の構圖によつて最も多量に東洋風の特色を現してゐる事である。しかし洋式建築でもズツと古い方になると時代そのものを超越したところに一種の面白味があるものだ。江の子島の大阪府廳もさうだが、大阪驛の建物なども隨分おもしろいもので、現在設計中の新驛舍ができても面白味の點ではとうていこの古い驛舍にはおよばぬかも知れない。最後に現在の大阪の建物についていふと、これは前述のとほりすべての樣式を無視してはゐるが、しかし實用と經濟の上から耐震耐火を第一條件として外廓にコンクリートそして材料には一切日本物を使つて、どこまでも自分達と親みのあるものにしたいと努力をしてゐる傾向が著しく目立つてきたのは事實であつて建築上これと名づける樣式はなくとも私どもはこの强い努力にまつて從來のスタイルを統一した一種の新日本式ともいふべき建築上の一分野を形づくる事になりはしないかと心祕かに期待してゐる次第である。

であることは、大體に於いて、今日の美學者たちの一定せる意見であるやうである。

『若し、藝術が快感を惹起するといふ單一の目的に歸着するならば、その範圍は比較的に局限せられ、その法則は一層固定せられるに違ひない。』とギュイヨオは說いた。彼に使れば、官能の快不快といふ性質は科學的な法則に依つて支配されるもので、その法則も他日いつかはこれを規定することが能きないものでもなからうと言ふのである。しかし、若し果して藝術が目と耳とを喜ばしむる外に目的のないものならば、それはまた他日いつかは單に技巧的法則の體系、知力活動の問題乃至は唯單に知得といふだけの問題にこれを還元しつくすことも可能であらう。かうして、恰も技手が化學的方程式に從つて物を構成したり、數學で計算した方向に色素を繰り出したりする場合に天才を要しないのと同じやうに、畵家も詩人ももも早や天才などを必要としなくなるであらう。しかし乍ら、單に能き得る限り最も巧妙に配分された快感の外にものをも與へ得ない藝術は、畢竟、唯世界の事物の純然たる抽象的方面のみを示し得るに過ぎないものとなる。かくの如き藝術は要するに全ての藝術に內在する一つの缺點をば非常に著しい程度に於いて含有するものとなるであらうといふのである。その缺點とは、即ち自然そのものよりも甚だしく狹小なものになるといふ點である。彼に依れば、快感の法則は藝術に對する一つの限界である。藝術に於ける天才の眞の使命は、正にこの限界を絕えず擴張するにある。

かく考へ來れば、藝術の價値が、その描字の方法や、表現の體裁や、題材の選擇に依つては決して左右されず、またその見わ與へるところの快感の如何に依つても論斷されないものであることは、瞭然たるものである。

藝術の眞の目的は、しからば、果して如何なるものであるか。

3

作者をして眞の藝術家たらしめるものは、即ち、藝術本能である。

『天才は著しく本能的である。眞の藝術家は少くとも天才の火の閃きをもつてゐるものである。』とはマアシャルの言であるが、一種止むに止み得ざる本能的なる衝務に驅られずしてその制作に向ふもの

は、すでに初めから藝術家ではない。初めに提言するが、藝術は計畫ではなく、衝動である。理智ではなく、感情である藝術家はその與へやうとする快感を意識的に目的とするものではない。彼は富や名を求める心をもつてその勞作に熱中するものではない。彼は唯生み出さうとの燃え昂まつた衝動以外に何物をも感じることなくしてその働きに自らを忘れてとび込む。そこには何等の計畫なく、打算もない。彼は唯自らの本能にのみ信賴し他の一切をかへりみることをしない。古來幾多の偉大なる藝術家の接したと稱ひらるゝ天啓なるものは、即ちこの絶對的なる、生ける、衝動であるこの衝動は時としてその藝術家への絶對的の權威者として、如何にも高きところよりの命令の如く來ることがある程、彼にとつての最上のものである。彼は唯生きんことを思ふ。唯生まんことをのみ希ふ。彼に對しては、理知的な作業を論究的な過程も、今は何等の助力をすることも能きない。彼の努力は唯ひたすら衝動的である。勿論、マアシャルも注意してゐるやうに、建築家や詩の作者等は徐ろに自分自らを何等かの方法で美的に表現しやうと企てるかも知れない。しかし、これがために彼が自らの選んだ仕事に熟練したにしても、そのまゝすぐに藝術家と呼ばれることは能きないであらう。唯彼が所謂衝動に動かされて、どうでもかうでも藝術表現の制作に從はずにあられないやうな場合にこそ、彼は眞の藝術家と呼ばるべきであちう。藝術の眞の目的は元來極めて單純にして、一本氣なものである。計畫的に固定されることなく、むしろ盲目的なものである。るそこには何等の形式と呼ばるべきものはない。唯あるものは外部的には何物をも附加し削減することの能きない情熱的な衝動のみである。

しからば、その衝動は何處から來るものであるか。

『藝術とは集中せられたる生である。』とはギユイヨオの說明であるが、藝術の目的が、即ち、生命の表現にあるべきはすでに詳細を要しないところである。藝術本能は即ちこの生命そのものから直接發する一つの價高き光であり火である。生命とは即ち活動である生活である。生活とは元來或る一つの個性の人格的燃燒の謂である。美とはこの燃燒に依つて內から外へ發せらるゝ永劫的な光輝である。生活のあるところ、そこに美があり、美があるところ、そこに如何に偉大なる藝術もあり得ないといふことはない。高き生活は高き藝術を生き得べき機緣を自らそのうちに含むものである。如何なる人工的に美々しき外面の華麗も、それがそのものにその根底を下ろしてゐない限りそれは唯の死物であるに過ぎないものであり、何等生活に根ざさざる表面の技巧が、唯の裝飾であるにすぎないことはもとよりの話である。ギユイヨオに依れば藝術とは、即ち、實際生活の縮圖であり人間の機制を最高度に縮小して見せるもの、從つて、私たちが營む實際生活中に現はるゝものよりも、より多くの生を實現せんとするものである。『偉大なる藝術は自然及び人生を幻想として取り扱ふものではなく むしろ、實在として取り扱ふものである。』と彼は書いた。『また人間の藝術が最もよく表現し得るものよりも、むしろ最も描寫し難いもの、即ちその領土に最も移轉し難いものをば人生及び自然の裡に感得するものが、即ち偉大な藝術である。故に、生の最大量を藝術の中に攝容せんがためには、先づ生を藝術の中に盛つて、果してどれだけがそこ

から溢れ出づるかを研究する必要がある

4

藝術の制作が一つの本能的なる必至の衝動に依らなければならぬものであり、その目的が生命そのものゝ表現にあらねばならぬことを論じ來れば、藝術論の大半はすでに論評し去られたも同樣である

この論理はもとより全らゆる藝術を通じて眞理であるべきは勿論のことであるが、こゝに、建築論上に於いては、建築藝術本來の性質上、この主張がいくらかの難點を含むが如く考へられる傾向かないとも言へない藝術が感覺を目的とする限り、そは常に科學的法則と相接するとギュイヨオは說いた。即ち、美學は物理學、數學、生理學、精神生理學等に接觸すると彼は說いたのである。例せば、彫刻は解剖學に、建築は光學に接するといふのである。しかも、もとより衝動は科學的のものではない。建築上のかの複雜極まる諸々の構造が果して單に藝術衝動にのみ依つて使驅し得られるか否か、構造法が果して建築に於いて如何なる位置を占有し得べきものであるか、こゝに、この問題は幾多の論難にあわなければならないかの如くである。この點に關して極めて常識的にして妥當なる論評を試みたものゝ一人はマアシャルである。

彼に依れば、藝術としての建築は過去に於いては、表的性質を或る設定された好く理解される構成的な形に與へやうとする企てから生じて來た。しかし乍ら、それがもつ構成の方法を發見するためには、またそれを完成するためには、建築術は必要ではなかつたし、單にこの方法を考察するだけでは、建築は藝術ではあり得なかつたのである。しかし、遂に私たちの種族はこの構成的な道具を私たちの中に美的感覺をもたらすやうな仕方で使用することを學ぶやうになつた。私たちは歷史を學ぶことに依つて、構造法が建築の本質をなすことを知るのは明らかである。即ち、構造法は建築藝術家の道具となるべきものである。若し彼がその構造法を道具として使はないならば、彼は藝術家ではあるかも知れぬが、建築家ではあり得ないものである。しかし、飜つて、構造法が單に彼の道具に過ぎない事、建築家にとつて達せらるべき目的は他の藝術にとつてと同じやうに、特殊な型の美の制出であることは忘れられてはならないのである。構造法の强調こそ大切であると絕叫する人々がある。そして彼等は男性的なフランスのゴシックを指摘して、建築を骨格の裝飾として扱ふべきであると私たちに指示しやうとする。しかしこれと反對に、かうした見地から離れて、ヴエニスの宮殿やフロオレンスの凉廊の光榮は指摘して、構造法の力は建築價値には殆んど何等の關係もないことを私たちに語る人々もある。

が、マアシャルは、この二つの全然相反する見解を結果させる時そこにこそ反ひて眞理を發見し得るものゝ如くであると說いてゐる。即ち、構造法は建築藝術家の一つの手段であつて、美の制出が彼の目標であらねばならぬこと、彼は彼の原型として種族と同樣に構造法に關する確實なる諸原理を熟知するやうにならねばならぬこと、が同時に求められなければならないのである。建築家が構造法を過重するあまり、高級な美の性質を失ふならば、彼は單なる建築業者であつて、決して、藝術家ではない。しかし乍ら、若し彼が巨匠であつて、全體の美に構造法的要素を、美を失ふことなくそこに美を摑みさへして印することが能きるなら

ば、彼は彼の作品に新しい面白味の源と大きな新しい價値を附與することになるだらうといふのである。從つて、フヲンスのゴシックの傑作の美に醉つてゐる人は、構造法の要素を過重視するあまり、初期のタスカンの巨匠達の作品を見る時は、しばしば空虚な感じを經驗するのであるが、そして、構造を蔑ろにして制作されたこの作品には些少な不快はあるけれども、均齊と細部と色彩とのありあまるほどの美は、アミアンやヴォヴエイの重々しい力を以つてしても作り得ないほどの、深い滿足を見る人に與へずにはをかないものであるといふのである。

藝術としての建築上に今一つの論難の口實を與へるものは、かく衝動的に表現されたる美が、果して建築の實用的効果と相殺せないものであるか否か、相殺しないものとすれば、美はこの場合はその實用的効果のため一歩をゆづらなければならぬものであるか否か、といふ點である。もともと藝術は何等實用的効果を目標としてはならないものであるにかゝはらず、建築に於いては、それがその實用的効果を考慮に入れないでは決して計畫されないものであるといふ點に於いて、論議の餘地をあましてゐるものである。

クロオチエはその著『美の哲學』に於いて、美を自由なる美と自由ならざる美とに分ち、建築を自由ならざる美の最適例として、その美がその實用的効果に對して知何にあるべきかを說明した。彼に依れば、建築に於いては往々にしてその所謂美術的部分が除外される。寺院は何ををいても先づ第一に信仰のために適用せられねばならぬものであり、住宅は生活の便宜に應ずべき多く部屋のを有せねばならぬものであり、何れもこの便宜といふことを主として決定されねばならぬものであつて、このために建築の領域が幾分制限されるのは實に止むを得ないところである。しかも、建築家は寺院や住宅や城塞等を或る程度まで美化しやうとしても、彼の手はこれらの建築の目的に縛せられ、僅かに彼の建築に於ける美的理想をば建築の外部的目的、即ち、建築にとつては全く基礎的なる目的を損傷せざる範圍に於いて表示するに過ぎぬ。

しかも、こゝに於いて考慮されなければならないことは建築にとつては第一の目的となるべき外部的目的が、必ずしも第二の目的即ち美的再創造に對する刺戟物を制限し若しくは防害するものではないといふことであると、クロチエも注意してゐる。そして、この觀察を基礎として考察する時、建築がその性質が不自由であり不完全であるとの論議が一つの誤謬に立つてゐることに氣のつくのである。即ち、眞に藝術的なる建築はすでにそれ自身そのあるがまゝの姿に於いてこの說を力強く是正するものであり、それ自ら完全なる藝術として存在してゐて、こゝにはこれらの相反すると見える二つの目的が決して相對立しないものであるしかも、優れたる藝術家はこの二つの目的の對立した場合に生ずる矛盾を防遏する手段をもつてゐるといふことを信じなければならぬ。しからば、果して如何なる手段に依つてこの矛盾を防止するだらうか。クロオチエに依れば、それは藝術家が自らの直觀及び美的形成、即ち明らかに對象物の竟極目的の實體として、しかも實用的目的をも充足するものとして取り扱ふところに彼の防止手段があるのである。故に、それをば美的直觀の器具たらしむるためには、彼は何物をも附加するの必要を認めないものである。即ちその實用的目的を完全に充足すればそれ

で充分な筈であるといふのである。百姓小屋と宮殿、寺院と假小屋等、それらはいづれも美化され裝飾されたる限りに於いてではなく、反對にそれらがその造られたる目的を表現する限りに於いて美しきものであつて、藝術の目的が單に外面のことに關せず、その容貌以外にあるべきは自明の理である。

5

かくして、建築本來の目標は、その構造法に依つて歪められず、實用的効果に依つても曇らされず、他の全らゆる藝術と同じく、唯、生命の表現を以つて根底的なる意企としなければならないものである。藝術が生命の必至的な表現であらねばならぬといふ方則は、建築に於いてもその例外を作らず、全らゆる藝術を通じて正しく適用されなければならないものである。從つて、その表現も建築のみに於いてその根底を異にすべき特殊の理由はない。その表現が即ち生命の發現としての絶對的な表現であり、生きて動きつゝある美の示唆としてそのまゝなる表現であるべきは當然の話である。その構造法に於いて何等の生命的なる必然性なきものは、如何に技巧の極をつくされたるものも、これを以つてまことに偉大なる建築を呼ぶことは能きない。外面の技巧に如何に美々しきもの藝術らしきものゝ全らゆるものを寄せ集めやうとも、そのに生命の躍動を覗ひ得ないものは、成功したる建築であるとは言へないのである。即ち、如何に複雜莊大なる建築に於いても、それが生命的存在としてこそ、初めて眞にその光榮をかち得るものであるが、建築らしく見せやうための附たりの技巧、附たりの裝飾は必要としないのである。即ち、その表現が決して構造のための造であつたり、外觀のための外觀であつたりしてはならないものである。

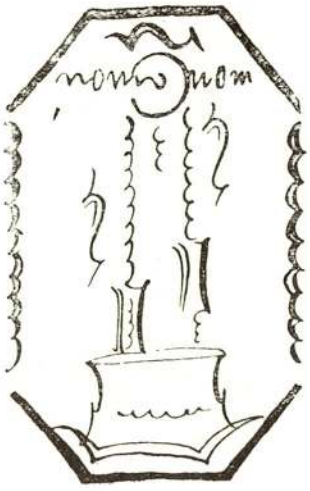
今日に於ける一般の決定は、モイマンに依れば、藝術の內容そのものに純粹に結合し乍らも、その內容の藝術的表現に留意せざる全ての表象、次に全ての純粹なる實踐的表象、そして、藝術の中に與へられたるものゝ理解をも早や扶け得ざるほど藝術そのものから全くかけ離れたる全ての表象、最後に觀照者の純然たる個人的記憶を包有せる表象を、不美的なる表象と見依すことに傾いてゐる。

成功せる藝術作品に於いては、美がすでにその作品そのものと不離なる關係にあることをクロオチエは說いてゐる。即ち、失敗せる藝術作品に於いては美が統一として現はれ、醜が雜多として現はれることは眞であるが、かくして、私たちは多少失敗せる作品に就いてはその內容を吟味することゝなり、言はゞその作品の美である部分を吟味することゝなるのであるが、完全なる作品に於いては、私たちは決してかくの如き吟味をしやうとはしないであらう。即ち、この場合に於いては、事實、その作品に於いて美である部分を指示することは能きない。それはそのまゝ美の完全な鎔和體であり、それは單に一つの質、即ち美を有するのみであるからである。クロオチエの考へに依れば、これは恰も人間の生命が全器官に亘つて循環し、決して或る限られたる部分にのみ存在しないと同樣である。即ち、藝術は全體としての術であつて、決して、一小部分品または單に表面的なる手先きの術、思ひ附きの業ではないのである。その容貌にのみ、他からの劣雜なる附加物を加ふることの、極めて空しきしぐさであるのは言ふまでもない。

その構造法の優越、技巧の秀抜はもとより歓迎さるべきである。研鑽され得る限りに於いてその構造法が極められ、洗練され得る限りに於いてその技巧が磨かれ、完全なる藝術的技術と科學的技術との結合がこそ望まるべきである。唯私たちは耳を聾するばかりの雑然たる騒音をあの壓倒的なる反響の故に、直ちに偉大なるシンフォニイであるとは信じ得ず、目を眩すばかりの色彩の雑然たる配列をその迫心的なる混亂の故にそのまゝ優秀なる壁畵であるとは認め得ないばかりである。藝術の完成は決して外面への發展に依らず、むしろ内面へ向つての浸潤に依つて達し得られるのである。容貌は單に容貌のためのみならず、その内質の止むに止み得ざる發現としてのみ、その存在の理由を保持し得るのである。劇場は先づ劇場らしく外觀の美裝に腐心しやうよりは、劇場としての機能を全うするに足るべき全らゆる適當なる設備をすべきであり、住宅は外から眺め内から見んために贅澤にあらうよりは、先づ住み心地よく實際的に正しく建てらるべきものである。容貌を容貌のために讃美するのは危險である。藝術の價値はその根底に於いて正しく計算されなければならない。表現を、單に構造法と技巧とのものとせず、生命のものとせよ。生命をして、一切の藝術の主たらしめよ。藝術をして今日生き、明日も生命あるものとなさしめよ。

容貌以上のものとは、即ち、こゝにいふ生命の謂である。生命のみ、永劫のものである。

春立と思いもあへぬ朝戸出口いつしかかすむ音羽山かな



統計の上から見た 住宅建築の傾向

松本儀八

自分は住宅建築なる者に幾分かの興味と執着とを持つて携つて來たのであるが、今日迄自分が取扱つた住宅建築の實際上の問題を、統計的に整理して自分として將來の參考に資し度いと考へて、折に觸れ十數年間の資料を筐底から引張出したり、追懷をたどつたりして氣の付いた事項から之を數字的に纏め掛けてみた。素より自分丈けの觀察であり、調査であり、特に京阪神を中心としての住宅―、然かも主として中流程度を標準としてのもので之が住宅一般の傾向だとは云へないだらうかと思ふが、然し斯様な實際的傾向の一端もあると云ふ事を紹介する事も强ち無益でもあるまいと考へたので勸めによつて稿をまとめる事にした。

左に其主なる統計の數種を拔萃してみた

一、住宅建築と其起工時季
二、住宅と年齡別關係
三、家相方位と年齡別關係
四、年齡と住宅外觀趣向別
五、住宅內部の趣向內譯
六、椅子式として取入れらるゝ主なる室と其傾向

住宅建築と其起工時季統計

（大正元年以降大正十四年に至る）

起工（着手）季節	百分比
春季 三月 四月 五月	38
夏季 六月 七月 八月	20
秋季 九月 十月 十一月	30
冬季 十二月 一月 二月	12



一、住宅建築工事起工（着手）の時季

試みに住宅工事に着手した季節を調査してみたところ前に掲げた樣な百分比を示して居る、即ち春先が三割八分、秋季が之に亞で三割、夏季の二割、冬季の一割二分と云ふ具合である。

昔から普請は春先から始めるものだなどと能く稱へられて居るが、夫れと云ふのも春三四月の日長で長閑な期節に起工すれば、壁の爲めに乾きの都合のいゝ夏季から秋を控へて普通の家は先づ九、十月頃には結構完成すると云ふ事になる譯である。

然し日本在來の砂壁の代りに漆喰や紙質のバブコボート、ピーバーボート、タイガーボードなどゝ云つた類の材料を以てすれば塗壁が乾くとか乾かぬとか云ふ心配も氣苦勞も入らないし工事期間をばウント短縮する事も事實に於て出來るし、何時から起工してもいゝ譯であるけれど一面日本人の心理的關係、經濟關係なども住宅起工季節とイクラか關連するものではあるまいかと思ふ。

二、住宅と年齢別關係

（大正元年―大正十四年に至る）

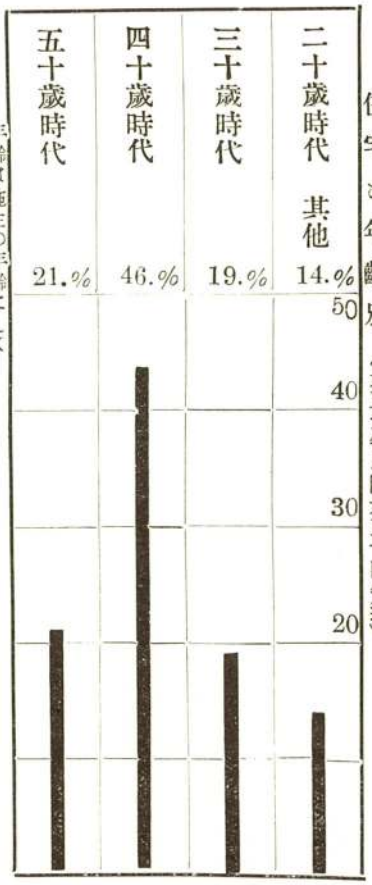
『百分比』

二十歳時代其他	一四
三十歳時代	一九
四十歳時代	四六
五十歳時代	二一

住宅と其建てんとする人の年齢關係などゝ云ふ事は勿論一概には言へないが、自分として今日まで關係したものを統計にしてみれば、四十歳時代が最多を占め、五十歳時代之に亞ぎ、三十歳時代、二十歳時代と云ふ順序である。

之を要するに建築せんとする人の年齢と生活上の自覺、社會的關係、其他頗る面白い關係が其處に見出さるゝ樣に思はれる

住宅と年齢別（大正元年以降大正十四年迄）

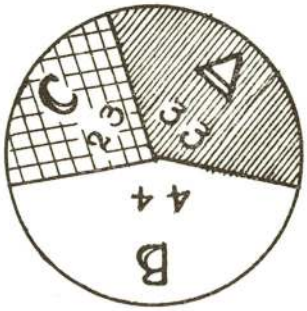


備考　年齢は施主の年齢にして二十歳時代とは二十歳より二十九歳迄を意味し以下同斷とす

家相方位と年齢別關係

	百分比			
二十歳時代	132	五五	三八	七
三十歳時代	A	四〇	四六	一四
四十歳時代		三一	四六	二三
五時十歳代		六	四八	四六
		間取其他所謂家相方位に拘泥せず科學的に立脚したるもの	建物の大局に對して差支なき限り家相方位を取入れんとするもの	所謂家相方位を絶對的に信賴して之を基調とせんとするもの
	178			90
	B			C

家相方位に對する信仰と年齢關係圖表



A…33
B…44
C…23

三、住宅と家相方位的觀念

住宅を建んとする場合何はさて置き所謂家相方位を擔ぎ出すのが日本人の通辨である。元來家相方位と云ふ者は其根據とする所、陰陽五行說から出發して居るが故に何等科學的價値としてはない樣に思はるゝけれど、其實古今を通じて傳統的に世人の多くが之を信じて來た者である。夫れと云ふのも存外人間は精神的に敏感と言はふか、又弱味と言ふのか、共

通的にそういつた感じに作用され易い傾向がある。何かしら疾病や不幸とか其他不慮の災難等に遭遇すれば遂に迷ひ出して、果ては途方もない信仰を作り出すものである。

然し時の流れにつれて段々と新時代の人は科學的に合理的に家相方位を所理せんとする傾向を爲す事は、自分の調査した統計に付て之を見る事が出來る樣である。

茲に年齡別と家相方位を信ずる程度を統計を通じてみれば、結局科學的に立脚し然かも文化の閃きを取入れようとするもの百分率に換算して三十三と云ふ數字を示して居る。つぎに建物の間取、經費などにさほど大した故障を生ぜない限り、家相方位に依つて善處しようとするもの四十四、間取が多少不便であらうと、例へ不經濟につかうが、何でもかでも、方相方位の律するまゝに從はんとするもの二十三と云ふ比である。

之に依て之を見ればざつと六六パーセント即ち六割六分までは所謂家相方位を支配し又は支配されようとして居る譯である。

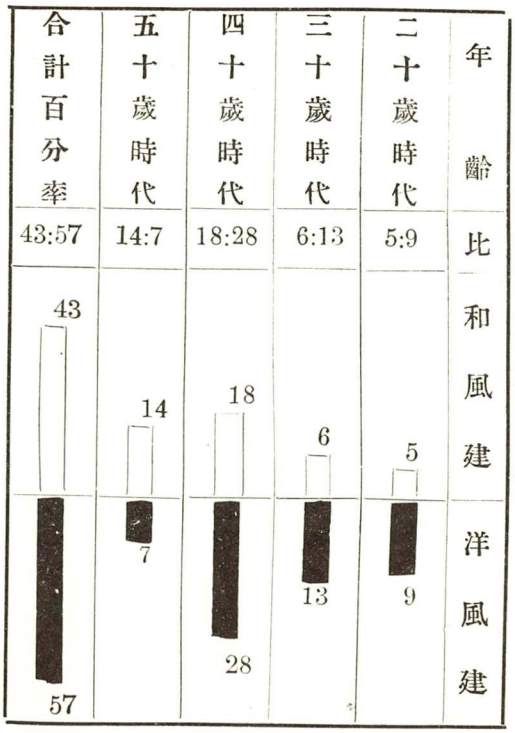
由來家相なるものは主に方角、方位から割出されたもので要は住宅と採光、通風濕度等の衛生學的並に地理的關係即ち其地方の氣象、氣壓などを充分に考査した上で室の方向、配置、窓入口の位置等を決定するのが所謂合理的ではあるまいか。何れの地方も一定したる家相方位の寸尺を以て之を律したり、其家の主人の年齡と家相を結付たり、窓の格好や、屋根の葺方、までも陰陽や鬼門方位に依て之を判斷して福慶、災禍、を論ずるなど、茲に至つては迷信も亦あまりに强過ぎるの觀がある。

つまり吾々の理想としては衞生、理學其他科學的方面を基調とした家相方位に立脚して、吉凶、禍福を斷じ、吉相を取入れて以て人類の幸福を增進せしめ度いものである。

四、年齡と住宅外觀趣向別

住宅を建んとする人の年齡と其住宅外觀の趣向別とを調べてみるに、二十歲時代と云ふ前途春秋に富む、潑溂たる壯年者間には、洋風建の外觀を歡迎せられ、三十歲時代、四十歲時代を經て五十歲時代の人達には一般に何と云つても今日まで親しみの深い和風建を望まるゝ傾向がある。然し大體からみて和風建(四三)よりも、洋風建(五七)の方が中流程度の家としては多量に建てらるゝ傾向になつて居る。

年齡と住宅外觀趣向別（大正元年以降大正十四年迄）



年齢と住宅外觀趣向別

	外觀和風建	外觀洋風建
二十歳時代	五	九
三十歳時代	六	一三
四十歳時代	一八	二八
五十歳時代	一四	七
	計四三	計五七

五、住宅内部の趣向内譯

外觀を洋風建としながら其内容は疊敷（座居式）本位とし、僅かに特殊の室（應接とか書齋のみを椅子式にする人が百分中三八、六を占めて居る。外觀洋風なるが故と云ふ筋合でもあるまいが、内容も全然椅子式にと希望したもの百分中僅かに八、八と云ふ割合になつて居る。

外觀を和風建としたものゝ、其内容を觀るに前者と同じく疊敷本位とし僅に椅子式の室を附加したるもの百分中實に五一、である。

斯様な統計からみれば外觀和風であろうが、洋風であろうが、内部は疊敷の室を多量に使つて坐居生活に染馴み度いと云ふ氣分の流れが濃厚である様に見へる。

住宅内部の趣向内譯

A 洋風建（外觀）

1、全部椅子式生活としたるもの　五

2、椅子式を多量に取入れたるもの　一二

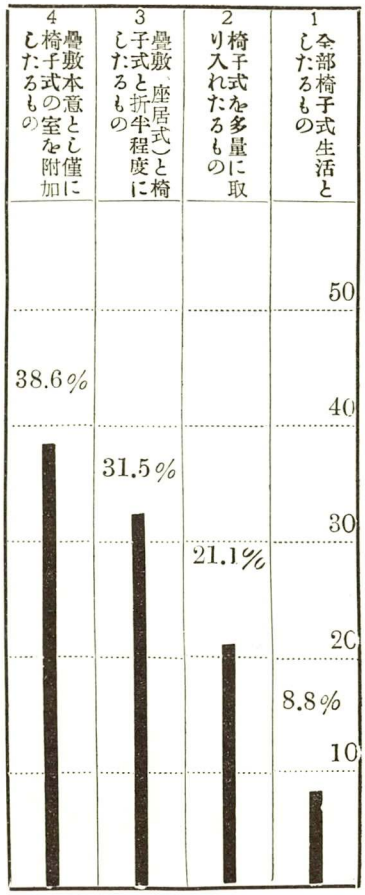
3、畿敷（座居式）と椅子式と折半程度にしたるもの　一八

4、疊敷（座居式）本位とし僅かに椅子式の室を附加したるもの　二二

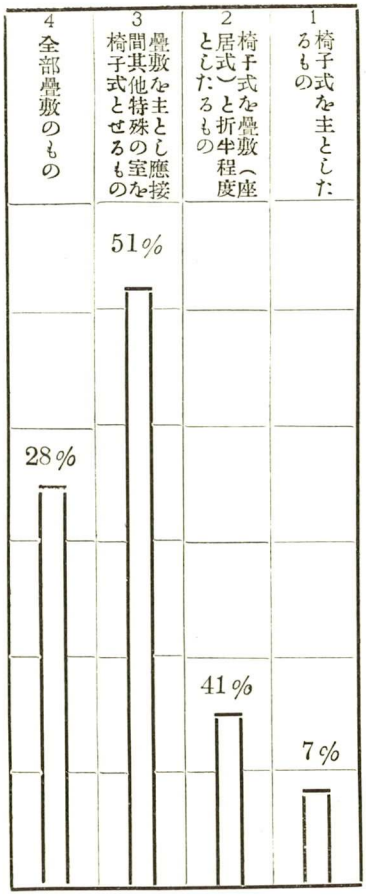
計　五七

住宅内部の趣向別（大正十年——大正十四年に至る）

A（外觀 洋風建百分率



B（外觀 和風建（百分率）（大正十年—大正十四年に至る）



B 和風建（外觀）
1、椅子式を主としたるもの　三
2、椅子式と疊敷（座居式）を折半程度としたるもの　六
3、疊敷を主とし僅に應接間其他特種の室を椅子式としたるもの　二二
4、全部疊敷のもの　一二
計　四三

六、椅子式（所謂洋風趣味）として取入れらるゝ主なる室と其傾向

（大正十年ー大正十四年に至る）

	順番	百分比
玄關及廣間（ホール） 應接兼書齋（ドローイングアンドスタヂー）	一	40%
應接室 書齋 食堂（ダイニングルーム） 居間兼食堂（シフチングアンドドクイニングルーム）	二	30%
居間 サンルーム ベランダー	三	20%
小供室 夫人室（ブードアー） 寢室（ベツトルーム）	四	10%

椅子式として取入れらるゝ室の中最も普遍的なのは何と云つても矢張り玄關（エキスピユール）、廣間（ホール）、應接兼書齋などが第一等で、大略表に示す樣に四段に別けてみて其四割を算して居る勘定である。

次ぎが應接室、書齋、食堂（ダイニングルーム）、居間兼食堂（シフチングアンドドクイニングルーム）で小供室、夫人室（ブードアー）、寢室（ベツトルーム）などが最も僅少だと云ふ譯である。所で其實小供室の如きは小供のある家庭では小供が學校方面で腰掛式に馴染で居る關係からみても、出來るならば家庭でも其延長として其習慣を助長せしむる方が小供の身體の發育其他の上からみても合理的で結構ではあるまいかと考へて居る。

以上統計に現はれた樣な次第で、正しく和洋兩樣の生活を營んで居るのである。世界中何處を探し廻つても、日本人の樣に靴下と足袋、靴と下駄と、モーニングに羽織袴、洋傘と日本傘、さては卓子と机、椅子と坐蒲團と、珈琲茶碗と、茶飲茶碗、コップと盒（チヨク）と云つた具合に色々雜多の日用品に至るまで御叮嚀にも和洋兩樣の準備を整へて居る國民は又と他に其例はあるまい。

今日生活の改善だとか、能率の向上、國民經濟の振作とか、國家富力の增進が何よりも急務と云はれて居るの時、何時迄もこんな不經濟、不徹底なる生活狀態を繼續すると云ふ事は、何としても考へものであると憤慨する向も段々と增へて來たのも、寔に當然の現象で『生活樣式と住宅』などゝ云ふ問題に付いては國民一般が今一層冷靜に攻究すべき問題ではあるまいかと痛切に感じて居る。

子日しに霞たなびく
野遙に出てはうぐひす
の聲をきくかな



飛鳥時代の寺院建築（二）

岸熊吉

再建非再建論は大體以上のやうな次第でありますが、寺院建築に於ては時代に依て其建物の配置が違ふのであります、此法隆寺の建築は百濟の樣式を採りましたから、百濟樣の伽藍の配置になつて居りますが、唐の樣式を眞似た時代に於ては伽藍の配置も唐樣になつて居ります、それで其配置の相違のことを一寸お話いたします。

百濟樣の配置と云ふのは、中門を入いると、金堂と塔とが兩側に相並び、中門の突當りに講堂があります、今の講堂は前述のやうに、位置は元とは違ひますけれども、正面にはなつて居ります、其前兩側に東に鐘樓西に經藏があつて、今でも多少名殘りは留めて居りますが、廻廊の外に所謂三面僧坊と云つて、東に東室西に西室、講堂の後ろ（現在の講堂の位置）に北室と云ふものがあります、大體さう云ふ配置になつて居て、塔は一臺でありましたが、奈良朝時代の唐樣になりますと、塔が二基になりまして、或は中門の外に東西に相並んだのもあるが、中門を入つて直ぐ兩側に塔があつて、其他金堂、講堂、三面僧坊等、大體飛鳥時代と變りはないのであります、所が飛鳥時代の塔が一基であつた時分には、法隆寺のやうに、金堂と塔が相並ぶ場合と、或は中門と講堂とを通じた一直線上にある場合と二種あります、此金堂と塔と相並んで居る例は、法隆寺の外にも法輪寺法起寺等があります、一方の中門から講堂まで一直線上にある例としては、今日荒廢して居ますが、大和に山田寺と云ふのがありまして、其の跡は儼然と遺つて居りますが、飛鳥時代に出來た寺であつてそれが中門を入いると、塔があつて、其の後ちに、金堂があり、講堂があり、尙ほそれと同じ行き方のものに、大阪の四天王寺があります、これは法隆寺より、先に出來た、飛鳥時代の寺でありますが、現在の主要建物は文化時代の新しい建築であります、併し幸にして伽藍の配置は元の通りに整然としてあるのでありまして、あれを御覽になれば一直線上にあることが分ります、又河內に野中寺と云ふ寺がありまして、法隆寺と同じ配置になつて居ります、是も古い建物はありませぬが、あとが遺つて居りますから、元の狀態を知ることが出來ます、そこで法隆寺時代には何故塔が一基であつて次

の時代には二基になつたか、是は大分難しい問題になりますが、先づ以て塔本來の目的から考へなければならぬ、元來塔は佛舍利を奉納するものである、お釋迦さんが入寂されて、火葬に附した所が、舍利（屍を燒くと、何かの作用に依て小さい石のやうなものが出來るさうである）が三一粒出來た、それを多方に分布したのでありますが、其所謂舍利を納めるのが塔の目的であります、故に普通我々が遺骨を叮重にするやうに、佛敎に於ては最も必要なものであります、其大事なお釋迦さんの骨である舍利を何處へ納めるかと云ふと、塔の上の九輪の一番上にある寶珠の中へ奉納したのであります、故に舍利を奉納すると云ふ本來の意味から云へば、何も下の方にあんな宏壯なものを造らなくとも、單に九輪（相輪）だけあれば可い譯であつて、元は相輪だけであつたのであります、それが段々に下の方へあゝ云ふ風なものを拵えて、三重であるとか五重であるとか、甚しいのは七重までのものを造つて、非常に宏壯な一つの飾りのやうなものになつたのであります、それが飛鳥時代には唯一基であつて、佛舍利を奉納してあると云ふ意時に於て非常に貴重な建物として、金堂と相並んで、最も重要な位置を占めて居つたのであります、又一直線上に塔金堂を列べたのも矢張り同じ意味に解釋して可しいのであります、それが奈良朝時代になつて、塔が二基になつたと云ふのは即ち形式的になつて來たのであります、何も納舍利の意味ならば、塔を二つに分ける必要はない、一つに奉納すれば可いのでありますが、所謂七堂伽藍の規模を立派にさせる爲めに段々形式的になつて來たのであります、そこで其二つの塔を東大寺の配置のやうに中門より外へ東西に相並べる場合もありますが、大抵の場合は中門を入つた所に東西兩塔が置かれたのであります、現在奈良朝時代のもので塔の二基揃つてありますのは、纔に中將姫で有名な奈良縣の當麻寺のみで、それ以外にはありませぬが、然し其塔の存在した跡の遺つて居る例は澤山あります、其一つは東大寺にあります、礎石はありませぬけれども、立派な土壇の跡が遺つて居りますが、塔の高さ三十二丈、ズッと廻廊が圍つてそれだけで一つの立派な寺の境内を占めて居る位のもので、東大寺は非常に規模が大きいから、塔が門の外

新聞記者の觀た大阪の建物

大阪市中目拔きの場所はもとより古風な船場、島の内の町中と云はず新らしく開けやうとする場末と云はず近頃ドン〳〵殖え行く輪奐の美を極めた近代式の高層建築物はやがて市中の面目を一新しやうとして居るが大は堂ビルより小は三四階建のものに至るまで、之等の洋式大建築物を「樣式」の上から眺めて見るとその美をあらそひその特長を競ひおの〳〵その技巧を誇つて盛觀を呈して居る樣が特に目立つ從つて建築家は如何にして新味を出さうかに腐心し「プラン」の立て方に專念して居るが現在大阪市内の大建築物がどんな「樣式」によつて建てられ、どんな方向を辿りつゝあるか、ある建築家の話る所はかうである。

ズット前は赤練瓦で化粧したりその中へ白練瓦で「繩」をつくつたりしたやうなイギリス風の復興式とも云ふべきものが多く建てられたのである。それが次第に瀟洒な科學的なそして活動的な感じを持つアメリカ風のものが歡迎されるやうになり更に近頃では若い建築家達によつてドイツ風のものが多く眞似られて居るが之は獨創らしく見せて實はドイツのものなどを眞似て居ると見る方がいかも知れぬ、しかし一般的に見て現在流行して居るものはアメリカ風にスペイン風のものを取り入れた建築樣式とでも云はうかだがこれを一つ〳〵の建築物に就いて云つて見ると一概に樣式などからは區別しにくいもので思ひ思ひのものを建てゝ居ると云つた方が至當かも知れない、市内の代表的建築物に就いて見れば堂ビルはアメリカ風の行き方にこまん〳〵

にありましたか、大抵の場合は中に置かれてありまして、此の隆寺の如きも中にありて、所謂百濟式の伽藍の配置になつて居ります。

次に愈々一つ〳〵の建物に付てお話する積りでありますが、大分時間が經過しましたから、大略を申上げて、あとは實物に付て又お話することに致します。

第一に金堂でありますが、飛鳥時代の金堂の特徴をお話すると、プランに於て著しき相違があります、是は二重になつて居りますが、下層は五間四面あります五間四面と云ふと、素人は方五間のやうに誤解しますけれども、建築用語では五間眞角のものは方五間と云ふので、五間四面と云へば、正面が五間で側面が四間であります、即ち金堂のプランは下層が五間四面で、上層は下層には構はずに、四間三面にし、柱を減じて居ります、即ち、普通下が五間なら、上も五間にするのでありますが、此金堂は下には全然關係なく、正面を四間とし、側面は三間にして非常に大膽なやり方をして居ります是は柱間を同じにして詰めて行くと、組物なんかが非常に接近して來て、上が餘ほどコセ〳〵して參りますので、そこらの點を當時の技術家が餘程考へたのであります、次に基壇、所謂土壇、石壇であります、大抵石壇を高くして其上に建物が立つて居りますが、飛鳥時代の建物の中で此法隆寺の五堂五重塔は壇が二重になつて居ります、併し中門と廻廊は一段で、樣式が少し違ふのであります、是は又實物に付てお話いたしますが、普通の基壇では、飛鳥以後になりますと、上へ大きな『かつら石』をやつて、下の方に地覆をやり、其間を板石でズッと埋めて、所々に『束石』と云ふものが入るのでありますが、飛鳥時代には『束石』なるものはありませぬ、ズッと板石を張詰めてあります、今は金堂と塔の下の方の壇は所謂束石式になつて居りますが、是は後世にやり直したのであります、最初は上の壇と同じ樣式になつて居つたのだが、餘計に出て居りますから、風化されまして、後に花崗石と換へたのであります、又此基壇の石は最近まで所謂火山灰の固つに凝灰岩と云ふことになつて居りましたが、それはあの當麻寺の上に、二上山と云ふ山があります、奈良縣から河内の方へ行く境の所で、其處にはドンヂリボーとか穴虫とか云ふ地名が遺つて居りますが、

しい飾りなどはドイツ風のものを採り入れ大阪ビルはアメリカ風のものに中世的のスペイン風のものを入れて居るが、そこは調和のとれない無理があつて多少矛盾したところが眼につくやうである、大阪クラブは構圖はアメリカ風であるが細部の裝飾は東洋風のものであり市廳舍や住友總本店などは一般に通じた所謂「近代復興式」と云ふべきであらう、古い建物で云へば中の島の府立圖書館などは實に大阪にたゞ一つしかないルチツサンスの立派な見本である府廳舍や大阪驛は昔を語るやうな間の抜けたところがあつて素人目には面白いものだ今後はかう云ふ面白いものは建たないだらうと思はれるさてこれからの建築界が樣式から見てどう云ふ傾向を辿りつゝあるか、一時和洋折衷といふのがよく用にされたものだがこれは外形だけを眞似たものであつてその精神を攝んで居ない、そこで日本文化を全部すてるわけには行かないのであるからこれからはそれに日本人としての氣持ちを濃厚に採り入れなくてはならないつまり「新日本式」に向つて進みつゝあるとでも云はうかこれは、現在大阪市の營繕課あたりが頻にこの手法を用ゐやうとして居る、市の手になる最近の建築物を見ると建物は銀筋コンクリートでその構造法などな進歩したものを用ゐて居るが材料は出來るだけ日本のものを使つて日本人に親しみのある感じを持たせやうとし部分的にも研究的な態度が見受けられる近く天王寺の茶臼山に建設される市立美術館などもこれに從ひ「日本の庫」としての美しさを握つたものにしたい筈だと云ふ。

其處から盛に法隆寺などの所謂凝灰岩を掘出したのでありまして、其山が噴火山で、曾て三回か四回噴火したことがありますから、凝灰岩だと云つて居るのでありますけれども、それは地質學上から調べますと、凝灰岩ではなく、松香石の分解したものであると云ふ一說もあると云ふことを參考までに、申上げて置くのであります、元は是は練石即ち人造石であるとまで云つて居つたのでありますが、誰が眼にも凝灰岩と云ふことを認めるやうになりまして、更に進んで東香石の分解したものだと云ふ風に、古建築の研究も段々各部に對する研究の歩が進んで來たのでありますが、次に礎石でありますが、先にもお話しましたやうに、飛鳥時代の礎石は大抵自然の上だけを平にしたものでありまして、所が博士に對して斯う申しては失禮でありますが、天沼博士が或書物で發表されて居るのを見ますと、飛鳥時代の礎石は殆ど總てが自然石の上を平にしたと云ふやうなことが書いてありますが、現に此五重の塔の中の礎石はさうぢやありませぬ、矢張り刳出し殊にハザマ石まで同一石でくり出してあります、故に法隆寺の同じ飛鳥時代の建築でも、中門と金堂と五重の塔と廻廊等の礎石が皆違ふて居るのでありまして、是は一樣式だとは言へないのでないかと私は考へるのであります、何れ又何かの機會に於て發表したいと思ふて居りますが、どうも違ふのであります、或は金堂の中の礎石に於きましても普通の石の上を平にしたものがあるかと思ひますと、多少刳出しのやうな風が遺つて居る所もあります、是も一つの研究材料にして居るのでありまして彼の燒けた燒けないと云ふ問題に對しても、火燒した元の石を使つたものならば此石を分解したならば、或は火に罹かつたか、罹からぬとか云ふことは直に分るのでありまして、此石の分析を賴んであるのでありますが、其結果に依て又何か新發見がありはしないかと思はれるのであります、兎に角さう云ふ風に色々になつて居るやうでありますから、之を一定のものとすることは出來難いかと思ひますが、大體に於て從來唱へられて居るやうに自然石の上を一寸均した程度のものであると考へて可しいのでありますが、次に柱でありますが、柱には無論エンタシスがありますし、柱の上の大斗は普通のものと違つて、下に皿のやうな盤が付て居ります、又斗拱に所謂雲斗雲肘木であります、擔は前述の通り一重で、垂木は四角な直線であつて、曲線は全く加つて居りませぬ、それで一口に云へば、此飛鳥時代あたりの建築は餘り細かい所に注意をしないで、大體の形などに非常に骨を折つたやうな痕跡が見えるのでありまして、一例を言ふと、垂木の數なども違ふので、大小不同でありますが、是は固よりそれで可いと思ひます、此頃の大工なんかは垂木間などを何分何厘何毛と云ふやうな隨分細かいことを計算するのでありますが、そんな必要はない、出來た時に、垂本が一本や二本方面に依て違つても一向構はない、所が此法隆寺の塔や金堂に於て其結果が現はれて居るのでありまして、不同でありまして、又垂木の大きさなんかも必ずしも同じ大きさに出來て居りませぬ、而も金堂にしても、門にしても其外形が非常に落付きが佳い、屋根

の勾配が緩くて、軒の工合が立派な非常に荘重雄大な建築であります、所が細部を見ると、何等餘り装飾的なことは施してないのであつて、最も簡單に要領を得て居るのであります、次に金堂の上で申せば下層と上層との間に勾欄がありますが此欄が又一種の様式を成して居りまして實物でお話した方が解り可いかも知れませぬが勾欄と云へば普通地覆と平桁と架木と斗束で成つて居るのでありますが、是は地覆と平桁との間に所謂くづしの組子があります、又其勾欄の下の所謂腰組なるものに一種不可思議な股を開けたやうな彫刻が附て居りますが、是は後世の所謂蛙股の原始的なものと見ても可しいのであります、而も是だけ申せば、何でもないやうでありますが、支那の山西省雲崗の石佛寺の石窟に此法隆寺と同じ様式の原始的な蛙股、或は又くづしの勾欄の組子があります、從て是が支那から朝鮮を經て日本に來たものであると云ふ經路が能く分るのであります、尤も金堂の勾欄は元祿年間に造り直したのではありますが、幸にして古い形式を承け繼いでやつてあるので、今猶舊の面影を見ることが出來るのであります、次に屋根の狀でありますが、是は今入母屋造になつて居りますが、古建築研究者の間では最初は入母屋造ではなかつたらうと云ふことになつて居ります、それではどう云ふ風な屋根であつたかと云ふ問題になりますが、金堂の中に玉虫厨子と云ふものがあつて其屋根が錣葺になつて居ります、所が面白いことには先程も申しました大阪の天王寺の金堂の屋根もそうであります又玉虫厨子の屋根に矢張り鴟尾が載つて居りますが、尤も元のものは泥棒に盗まれて、現在のものは新しいものでありまして、併しそれが元のものと同じ形であることは、同時代の法輪寺の或所から發掘した鴟尾の斷片の様式が一致することに依て分るのであります。

尚ほ金堂の内部は三間二面を内陣として、白漆喰の佛壇(土壇)を築き、其上に色々な佛體が置いてあります、其佛體は大部分建築と同じく飛鳥時代の非常に貴重なものであります、それも篤と實物を御覽になれば、此頃見ます佛像とは様式が非常に違ふと云ふことがお解りになるだらうと思ひます、又其佛様の上に天蓋と云つて四角な函のやうなものが吊下つて居りますが、此様式が非常に珍しいものであります、向つて右の方のものは鎌倉時代に造り替へたのでありますが、内陣中のものと、左のものは元の儘であります、是も注意して御覽になれば、非常に古い形式で、天人だの鳳凰が上の方にくつ付て居りまして、非常に面白いものであります、又先程申しましたやうに、内陣の方は大抵彩色を施しまして、天井にも模様が畫いてありますし、上方の壁面には天人とか、色々の山水などが畫いてあります、下の大壁にある有名な壁畫は四佛淨土と云つて、阿彌陀の淨土、釋迦の淨土、藥師の淨土、寶生佛の淨土と云ふ風に、此壁畫の本體は略々見當が付て居りますが、佛體一々の名稱はまだ誰にも分つて居ねぬやうであります、其年代は和銅でありますから、法隆寺が出來た飛鳥時代よりは少し後になつて居ります。

次に五重塔でありますが、其様式も細部に於ては金堂と少しも變らないのであります、併し外形は全然塔と金堂は違ひますから是は五つの重層になつて居りますが、上の方の柱の間數を減じた例は此五重塔に於ても見ることが出來るのでありまして、四重目までは柱を三間にして

それから上は二間にして居ります、是等も非常に大膽なやり方で矢張り金基と同じやうに、組物が非常に接近して煩くなるから、それを調節する爲に特に二間にしてしまつたのでありまして、是等に注意すべき點だらうと思ひます、又其屋根の檐端を五重とも一線に引通して見ますと、是は一直線でなく、一種の折線をなして居ります、即ち極端に云へば、鋸の齒のやうに、凹凸があります、所が法隆寺以外の塔にはそれが無いのでありまして、殊に近世のものになりますと、木割法が出來ましてから、遞減の律が千遍一律でありますから、どうも佳い形のものが出來ぬのでありますが、以前はそんなことは構はずに、屋根の軒先に出入りがあります、それ等も餘程考ふべき點だらうと思ひます、尙ほ上の九輪は元祿年間に造り直したのでありまして、古いものではありませぬが、高さや大體の形式は元の儘を採つたのであらうと思ひます、又此塔や金堂には龍が捲付いたり、色々な彫刻した支柱が建て居りますが、是は最初からあつたものではありませぬので元祿の大修理の際に、あれに突支棒だけでは物足らぬと云ふので、龍を捲き付けたのでありまして、後世のものであります。

次に中門でありますが、是は又プランが非常に變つて居ります、既に入つて來られた方はお氣付きかも分りませぬが、普通の門は中央に柱が無いのであります中央に柱が無ければ、柱の間數は所謂奇數でなければならぬのでありますが、此中門は正面の柱間が四間で、即ち偶數であります、是は非常に珍しいのであります、門と云ふものは始終出入りするもので、正面に柱があつては、非常に邪魔になるやうな感が致しますが、是はどう云ふ考でやつたものか、偶數になつて居ります、上層の方は金堂や塔に倣はずに、柱間の數は同じでありますが、唯遞減律は非常に餘計に上の方が引込んで居ります、それで何故之を偶數にやつたかと云ふことに付ては大分昔から疑問に思つて居つたやうであります、鎌倉時分の記錄を見ますと、聖德太子は子孫斷絶と云ふことを主張せられて居たから、斯う云ふ異例な不便なものを造れば、後世に於て模倣をする者は無からうと云ふ意味を含んで建てたものでないかと云ふやうなことが書いてありますが、是も一說であるかも知れませぬけれども、我々が考へますのには、さうではなく、前にお話したやうに、飛鳥時代の建築に於て塔と金堂は最も重要なものでありますから、一方は塔の方の入口一方は金堂の方の入口と云ふ風に解釋した方が可いのでないかと思ひます、又構造上或は外觀上是はどうしても金堂塔と釣合つて大きさを決めなければならぬのでありますが、三手先とか二手先とか云ふ普通の組方であるならば、些とも構まひませぬが、雲斗、雲肘木と云ふやうな非常に簡單なもので、檐の荷を支へる爲にはどうしても釣合が取れない、それ等の點から色々考へて、斯う云ふことにしたのでないかと云ふ考も生じて居るのでありますが、是は果して製作者の意嚮がどうであつたか、今に於ては單に推測に止まるので、確實には分りませぬが、皆樣に於ても何か外にお考がありましたら、それを御覽になつて御研究になれば、大變結構だと思ふのであります、それで此中門はプランが違ひますが、細部に於ては塔と金堂に於て述べた所と少しも變りませぬから、それは省略を致して置きます。

次に步廊(廻廊)であります、是も同時

代のものでありますが、組方が極めて簡單でありまして、單に柱と、柱の上に大斗を載せ、又原始的な普通の自然の木を少し加工した程度位の梁が載つて居つて其上に所謂合掌だけをやり、其上に三斗をやつて棟の桁を受けて居ると云ふ　非常に簡單にして要領を得たものでありまして、而して乘木なんかも一重でありますし、直線になつて居ることは他の飛鳥時代の建築と變りはないのであります。

以上を以て大體法隆寺に於ける飛鳥時代の建築の說明は濟んだのであります、其他法起寺と法輪寺の三重塔が同一時代のものでありますけれども、法隆寺の建築を見たならば、他の建築は何等價値無し——と云つては惡いのでありますが、三重目を後でやり通したりした完全なものではありませぬから、其說明は略して其樣式は法隆寺のものと同じ時代のものであると云ふことを御記憶願へば可しいのであります。

それが此飛鳥時代の建築は先づ大體さう云ふ風な一種の特徵を有つて居りまして、用材は主として檜でありますが、再建非再建論は別問題として、兎に角一千三百年の間燒けもせず、其構造を調べて見ても、大部分の柱其他の强度も餘り變らず今日迄殘つたといふ點に於て一種の世界的奇蹟と云つても可いかと思ひます

ひとりねる草の枕の
うつりがはかきねの
梅のにほひなりけり



建築の本質に就いて

本野精吾

『建築』――之れは誰れが讀んでも建築と云ふ字に定まつて居ますけれどもソレが果して何を意味するかと云ふ問題に立ち入る場合には直ちに色々の難點に逢着するのであります。

『建築は一つの土木工事である』

コウ云ふ考へ方は土木專門の人或は構造專門の人々に依て考へられる事であります。先年物故せられた日比氏と佐野利器氏もコウ云ふ事を云はれた事を記憶して居ます。專攻の立場から當然起り得る考と思ひます。

『建築は人間靈魂の表現である』

コノ考は全然別な、即ち人間の精神的方面からのみ建築と云ふものを見た考へ方であります。石本氏との會話の中に分離派の某君にコンな風な考があると云ふ事を申された事を記憶します。

『建築は人間の實用の目的物である』

コウ云ふ考が現時最大多數の人々の考を支配して居るらしく思はれます。建築が人間の用ゆるものである以上之れも當然の考であります。

『建築は商業的建築物である』

コウ云ふ様な建築の商業化と云ふ考をして居る人もある様です。之れは何かで建築(現代の)は商業的(コンマーシャル)ならざるべからずと云ふ議論を讀んだ事を記憶して居ます。

コンな風に様々に考へられる極めて複雜な素質を持つて居るものであります。今之等様々の考へ方に就いて考察して見様と思ひますが、其前に十九世紀の初めに方つてフランスに

於ける建築學の大家ビオレ、ル、デュックの有名なる建築に對す定義を揭げて先に進まうと思ひます。今全文を載せる事を略しますが、彼の考によると、

建築は建造の一つの技術であつてソウして其中に理論と實際との二つを含んで居る理論とは美の方面のみを云ふソレは趣味とか傳統とか科學とか云ふもの即ち一定不變の法則の上に立つ方面を含む。實際とは理論を實際に應用した方面で、材料氣候風俗習慣と云ふ樣なものに立脚した理論の應用である。要するに實際の必要即ち物質的要求の上に立つ部分を云ふ。此の二つが綜合して一つの建築と云ふものが成り立つ。

と云ふのがビオレ、ル、デュックの說であります。大膽にして決定的な考であります。私は今斯の考を全的には肯定する事は出來ません。けれども此の中には何處かに動かす事の出來ない何者かゞあると想はれます。斯の定義に就いて論議する事を後節に讓つて最初に現時樣々の人の頭を支配して居る考に就いて直截に考察を試みて見樣と想ひます。

建築は土木工事である——建築が地上に建てられる建築物である以上動かす事の出來ない事と想ひます。古來の優れた建築として人類が地上に遺した多くの建築に就而考へて見てもソレは殆んど動かす事は出來ません。傳說に殘されたバビロンの王宮の如きハギア、ソフイア、の如き、ローマのコロシユムやパンテオンの如きバリーのノートルダムの如き皆尨大なる土木工事である事は議論の餘地が夫ません。けれども之れに就いては尙考の餘地が殘されてあります。夫に就いて二つの異なつたる例を擧げます。一つはギリシャの殿堂建築であり、他は印度の佛敎窟院であります。アゼンスのバルテノンは美しい質の大理石を積み重ね、ソレを刻んで彫刻的の効果を出し、ソレに濃厚華麗な色彩を施したものであります。之れを一つの土木工事として見るには餘りに彫刻的領域に這入り過ぎて居ます。其の上餘りに繪畫的であります。土木工事として見るには材料の構造的用法を餘りに無視してあります。印度の佛敎窟院に至つては全然彫刻其物であります。自然の岩山を切り開いて一つの建築的形態を自然の岩床から刻み出したエロラの殿堂や、山腹を切り込んだアヂアンタの窟院等は純然たる彫刻の領域に這入るものでありまして、建築は地上に建設する建造物であると云ふ點には非常に遠いものであります。

コウ云ふ風に考へて行きますと建築は一つの土木工事であると云ふ考方も極一面から見た建築の素質である事が考へられまして、之を以て建築全體に及ぼす事は出來ない樣に想ひます。

モウ一つ建築を繪畫的に取扱つた例としてベニスのサン、マルコを擧げます。サン、マルコはハギア、ソフイアの連續でありますけれども、ハギア、ソフイアの樣な土木的即構造的興味は非常に少なく不合理極まる構造物の表面をモザイク等を豊富に繪畫的に取扱つてあります。之等を見ますと地上に建設したものには相違ありませんけれども、土木的立脚點即ち構造上の眞と云ふ樣な點からの興味は殆んどないのであります。

構造上の眞——此の事に就いて少しく述べて先に進まうと想ひます。煉瓦なり石なりコンクリート（鐵筋コンクリートは

暫く後節に殘す。今はローマに於ける様な純コンクリート構造を意味する）と云ふ様な材料を積み上げ又はカストして一つの建造物を築き上げて行く場合に構造の自然から出て來る形の興味を最深の形體美とする考へ方でありまして、之れは建築美の一つの重要な要素であると思はれます。前に掲げました例即ちハギア、ソフィア、バリーのノートルダム、ローマのコロシュム及パンテオン等構造上最も合理的に出來て居てソレが美的表現の大きな基本になつて居る建物は數へ擧げれば隨分にあります。コウ云ふのは構造の眞と建築美との極めてよく一致した例であります。云ひかへれば最も合理的な構造其物から出て來る形が全體の最後の表現に其儘表はれて居るので、ソレを建築美に對する構造上の眞と云へると想ひます。

然しながらコウした構造上の眞のみが建築美の最高境地であると云ふ事は云へないのであります。一つの例を直ちにギリシャのパルテノンに求める事が出來ます。パルテノンの大理石の使用法は構造上合理的とは決して云へないのであります。ソレにもかゝわらず建築美の典型として人類の遺した貴重なものとされて居ます。印度のアジアンタ窟院に至つては更に構造の基本を超越したものであります。

茲で考を現代の構造法即ち鐵筋コンクリートなるものに及ぼして見様と想ひます。ココには構造上の眞と云ふ事に著しく變化を生じます。極言すれば構造上の眞と云ふ事は殆んど成り立たない程構造と形態との關係は自由であります。在來のローマのコロシュムに於ける如き純性コンクリート構造、ハギア、ソフィアの構造ゴシック寺院の構造、等は之等の材料を以てしては現代の進歩せる構造上の智識を以てしても、之等以上に材料と形態の適切なる考案をなす事は不可能である程に洗練されたる構造法であると云はれて居ます。飜て鐵筋コンクリートの場合を考へて見ますと、材料と形態との關係は非常に自由であります。今ある一つの力にたへる柱を考案する場合に全體の太さと鐵量との關係を幾様にも考案する事の可能性を持つて居ます。斯の點が他の石とか純コンクリートとかの材料と違ふ主要な點であります。此の性質は形態を構造上の眞と云ふ事から解放して、視覺の判斷を基礎とする構造の自由の中に導き入れるのであります。事實鐵筋コンクリートに於ける構造上の眞と云ふものは考へる事の出來ない程形態は廣軌にして多様な區域に活動する自由を持つて居ます。

コウ云ふ工合で鐵筋コンクリートの場合には構造上の眞と建築美との關係が構造の眞と云ふ在來の考へ方と違つた一つの世界に這入つて來ます。斯の事は現代の建築を考察する上に重大の關係を持つのであります。

以上申し述べた事柄は建築は一つの土木工事なりと云ふ事に關聯した事柄でありまして、之れを綜合して見れば、土木工事の一分野として考へ得る建築は其の一部に過ぎないと云ふ事が肯定出來ると想ひます。（未完）

建築踏青紗（其の二）

廣岡峰太郎

かりそめにも、大建築物の建築主ともいはるゝべき程度の人達が、都市的施設の一としての街路照明の燭光を惜しむ如な、けちな眞似はしらないであらう。だがそんなにいつても、現在大阪市中を歩くと、街路に對して全然考慮を拂はれてゐない樣な、建物のある場所は幾らである。

こうなると、建築主がけちなのかそれとも設計に携つたところの建築家としても罪が一部あるのではないか、どつちかゞ悪い事になる譯であるが、建築主は、大體に於て素人だ。素人の建築主に、專門家の建築家、照明家が何故腹藏なくこんな問題を提出しないのか。何故こんな問題を解決しようとしないのであらうか。

肩をつんざく如き風の吹き荒ぶ夜なんか、無燈火に近い何時追剝でも出るかも判らない如なビルデインク街でも、復來せなければならない樣な人達の惨めさをも考へても見なければならない。當然に都市居住者として考の慮の中に加へられてゐるべき問題ではないか。

街路照明が、都市居住者の人生を明るくするとは言はない。又絶對的に都市居住者の安寧を計り得るものであるとは言はないが、だが都市的施設の一として街路照明と、建築は充分に取締るべき事ではないか。けだし社會風教上にまで、累を及ぼすべき問題ではないか。

——何故？近來都市問題の論議さるゝ折柄らにもかゝはらず建築家、照明家、の都市的施設の一たる街路照明を輕々に看過せんとするのであらうか。

——何故？建築監督官廳たる當局者に於ても一顧をも與へざるか。

文化都市即闇黒都市たらずに終れば又何をか言はんやである。

又

建築物の內部に於ける照明設備、方法の近代比較的考慮を拂はれてゐる折柄に建物を離れたる外部の照明設備、方法の閑却され勝ちの樣な現況では無からうか。

——曰く橋梁上の照明、曰く公園地の照明、曰く等々の、照明問題に於ても、都市居住者として、公人として、建築家としても何等の對策なく徒らに惰眠をむさぼるには忍びないものがあるであらう。

照明設備、方法の約束は種々であるにしても、約束は約束である。要するにその約束以上の第六感に訴へる問題なのである。德孤ならず必ず隣ありが、などと納まりかへつてゐられる樣な泰平な御代でもなからうと思ふ。

夢の世界

——最も現實的なるべき建築物の上に於ても、最も非現實的なる夢の世界が包藏され、醸されてゐる場合がある。

どんなに幼ない子供でも持つ如な、あこがれの夢の世界。

世の建築家も畢竟幼ない子供の持つあこがれの夢の世界の探求者ではないか。

强がり

强がりは、自己冒瀆だ。

およそ、藝道の上の中途半端を歩いてゐる者に限つて、强がりを言ひたがる自己冒瀆者だ。精々、空威張りする。そして自瀆する結果、その人自身の人格迄でも破產して終ふ處の最後にまで落入るのである。

强がりは建築家各自の性格に依るけれども、强ひて强がるには及ばないであらう。自己の虛勢を張ることは見苦しい。

世の多くの建築家達は、意識的、無意識的に、强がりをいひ、虛勢を張り、自瀆的制作をこさへてゐないであらうか。藝術的に、征服とか覇者とかよくいふが、こゝにいふ處の、强がりや自己冒瀆の者の口からこんな言葉を吐出されるといふ事は、征服者とか覇者とかに對して、二重の自己冒瀆になる譯でないか眞の意味に於ける消極的を知つた積極的だ。弱氣を知つた强氣だ。そうでない强がりは、我武者流だ。我武者流な者に何が出來得ようぞ。その者の製作がある境地にゆきついた如に見えてもそれは嘘だ。嘘の境地に行きついたのだ。まぐれ當りだ。一皮脫がしたらすぐ降參する。

みつちりと鍛へ上げる事だ。建築家としての人格を鍛へ上げなければいけない。鍛へ上げもせない者の强がりや、虛勢はその結果に於ては皆空だ。零だ。買被られる事は警戒せなければならないか、精一杯の實實でも認められない者といつても悲觀するに足りない事だ。自信が勇氣づけてくれる日が廻つて來る迄は、自惚れと間違つてはいけない。どんなにそんな人達が話せる人達であるか一寸考へて見ても判る。自分の裡にこんな片影は認め得るか、得ないかといふ事を强がりをいひ、虛勢を張る前にみつちり考へ拔かなければならない。

——藝術的にいふ、積極消極、强氣弱氣の味はみつちり考へ拔く間に自ら明かになる。

閑文字の辨

建築家にとつては糊と鋏との技巧は要しないが、世上に散見する閑文字も味讀する事が必要です。閑文字の有用なりと思惟さるに至りてこそ此處にいふ處の閑文字の本領を發揮したものといふべし。閑文字の有用なりと、思惟さるゝに至りては、おのづから閑文字なる名稱は除き去らるゝべしと雖も、往々世上に於て閑文字に似たるの故えを以て、是を深く周讀せず輕々に閑文字の又有用なるを合點會得せざるがの趣きあるは何故ぞ。わが建築界に於ても殊に然りでわはなからうか。



繩墨餘事

南信

自分はもとより繩墨に遊ぶもの文筆の責を負はせられる事に甚だ苦痛を感ずる。此の一文は唯協會への義理をはたすもの、何を綴り、何を說くか、自分自ら知るところがない。題して『繩墨餘事』といふ。我が餘事なるの意である。

誰の作とも知らぬ。こういふ小說を讀んで居る。

貧民窟である。一人の女が住んで居る幼い頃のやけどの跡が、顏の半面をみにくく光らせて居る。下まぶたが燒け落ちて、泪が淚線から、堰を失つた流の樣に絕ねずじめ〳〵と頰につたはつて來る。此の女がみすぼのわざに、朝な朝な、はでな着物に身をつゝんで、かなしくもお白粉にみにくい顏をぬりつぶして、飴おけを頭にのせて、街へ出るのだ。

こうした女にも戀があるのだ。一人のやくざな亭主を養つて行かねばならぬ。女は男にほれて居る。きらはれながらもみにくい顏の惡口を言はれながらも、かぼそい腕に賣りためた一圓二圓の金を、男の酒手に、ばくちのしろに、渡してやらねばならぬのだ。

男は女を好きではない。が、つまりは弗箱の樣なものだ。みにくい顏を我慢して、朝からちび〳〵やりながら、女の賣溜を待つて居る。

今日も今日とて、男はちび〳〵のんで居る。女は働に出る爲めの身だしなみに餘念が無い。手拭地の浴衣、派手な友禪模樣の晝夜帶、赤いメリンスの前掛もけば〳〵しい。外には夏の日がカツカツと暑い。

『おい、すこし置いて行け。』

いつものせりふが出る。

又かと女がいふ。

すつたもんだの末、男の最後のたんかが出る。

『なんでえ、そのつらに白えものなざア塗りやがつて、少しは人間らしくでもなつたつもりか。』

話はそれで終りである。

『何でね、そのつらに白えものなざア塗りやがつて、少しは人間らしくでもなつたつもりか。』

私は此の最後の句をくりかへして書く

のは、此の言葉の中に、いたましい人生の悲劇がかくされて居るからだ。いや、社會萬般の悲喜劇がかくされて居るからだ。

私は此の句を思ひ起しながら大阪の町をあるく。見給へ、三角にきられた町家の壁に、たんねんに、しかつめらしく、もつともらしく、白いたいるがはられて居るではないか。これが悲喜劇でなくて何であらう。三角にきられた家許りではない。いたるところに、多かれすくなかれ、此の悲劇に逢はずに通りすぎることができるであらうか。

『目にて目をつぐなひ、歯にて歯をつぐなふ。』といふ言葉がある。目を目のあるべきところに、歯を歯のあるべきところに置くことが美への最後の途ではあるまいか。

材料に所を得しめると言つた或る先輩の言葉を思ひおこす。そして尊敬の念を新たにする。

或る洋食屋の主人と席を同じくした。或る家の落成披露の宴である。

今日の御馳走はすべて此の主人のさしがねによる。主人は若く、そして新らしい考を持つて居る。

先づオールドウブルの皿が出る。

『これは日本の皿をつかつて見ました。食器の類はだん〳〵日本のものをつかつて行きたいと思ひますので』と主人は言ふ。

注意されて氣がついて見れば、美しい奥州が目につく。

つぎ〳〵の料理が、それ〴〵日本の器具に盛られて出る。スープは蓋茶椀に、シチューは茶椀蒸の茶椀に等々。そして最後に、漆の香の新らしい吸物椀がフインガーボットとして出された。

それでいゝのだと私は思ふ。

私はいろ〳〵なことを教へられた。

建築の事を考へる。

あめりかゝら來た柱をたてる。

南洋からきた額縁をはめる。

ふらんすから來た壁紙をはる。

いぎりすから來たカーテンをかける。

どいつから來た便器にうんこをする。

それが日本人の建築であり、日本人の生活であるのだ。

こんな生活は少々あき〳〵だ。

新しい茶室運動が起らねばならない時代が來て居るのではあるまいか。利休や遠州が生れねばならない時代が來て居るのではあるまいか。

諸君よ野に行かう。野には櫻がさかりである櫻に霞がたなびいて居る。どんよりと、しかしうらゝかにかぎろひが立つ

北齋が富士をかいた。

その仰角が何度であらうとも、そのパースペクチヴによる高さが、たとへば一萬八千尺であらうとも、その名什であることに何のかゝはりもない。

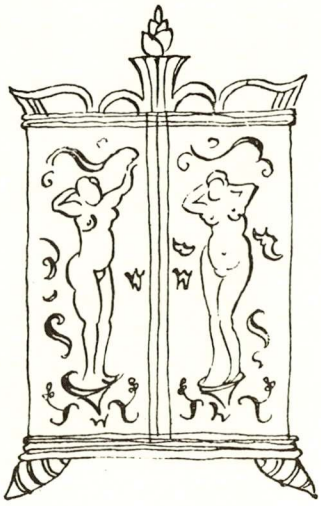
藝術には眞でなければならないといふきていはないのだ。眞であるらしければいゝのだ。 "Art is an illusion, a pleasing lie whitch we are willing to consider truth." である。

われ〳〵はこのことをともすれば間違ふ

われ〳〵のなしあたふ計算が、ある柱に一尺であることを命ずる。われ〳〵はそれを一尺にしなければならないと考へがちである。

そんなことはどうでも良いのだ。

われ〳〵はもつと本質的な事を忘れては居ないだらうか。何かの寓話にでも有りさうな、たましひを忘れた犬になりきつては居ないだらうか。私はいつも氣になつて居る。



木造最後の大劇場

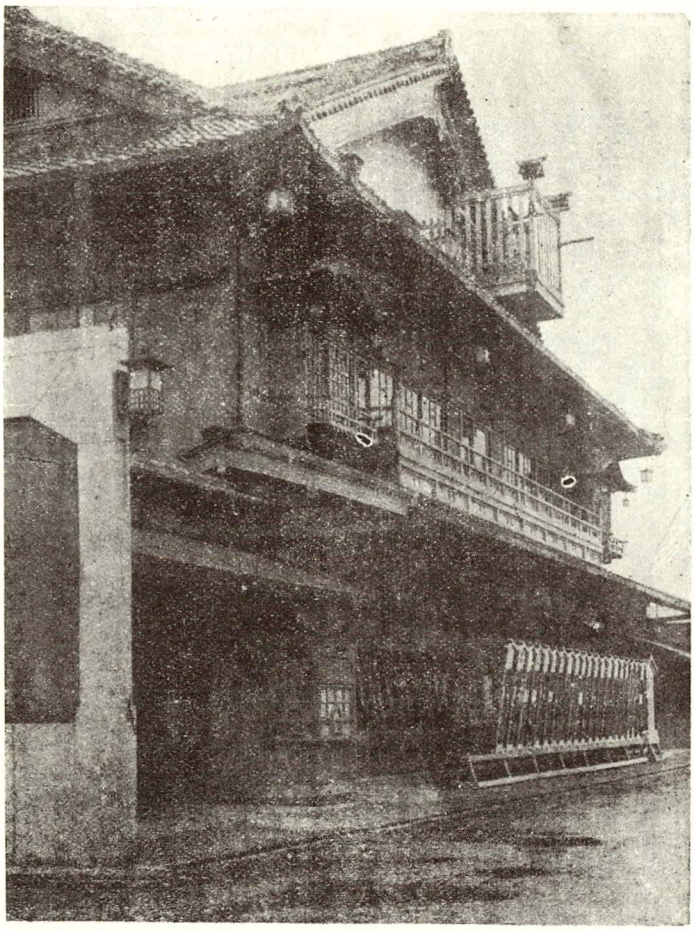
‖鶴橋劇場の新築に際して‖

池田谷久吉

市街地建築物法が施行され、殊に同法第十四條の規定に依る構造規則が發令されたために市街地建築物法の適用地には劇場建築に於て定員七百五十人以上のものには其の壁體、床、柱、屋根階段等の主要構造部が耐火構造でなければならぬ規定に依つて最早や建築物法の適用都市には絶對に木造の大劇場が建築されないことになる。

こうした制限は單なる構造方面にのみ止まらずあらゆる方面に影響し、殊に外觀、樣式の上にも一大變化が起つて來る事も當然のことである。

然るに最近大阪市の東部の新開地たる東成區鶴橋町の柿落された鶴橋劇場は恐らくは木造劇場建築の最後のものであらうと思はれる。



これは法律施行されたとき已に設計があつてので特に認められたものでその後のものには凡て耐火構造規則にま

つて出來てゐる。

× × × ×

あの破風造の間に設けられた櫓こそ實に我國劇場建築のシンボルとも云ふべきものであつて一種云ふべからざるなつかしい感じを表はしてゐる。

ところが追々にその影をひそめ現今ではその遺物が極めて少なくなつたので時折に見る櫓は實に愛着の念さへ起るのである。

近時劇場建築に對して余程一般に深く研究されかけて來たことは非常に興味ある問題であると共にその反映として東京の某誌などはずいぶんこの方面のことをやかましく研究、論評されてゐることは大變結構なことで少くとも私達は敬意を表してゐる。

扨て我國の劇場建築にはその演技の方面に數多の部門を滿足させるに充分であらねばならぬことは一大難關ともいふべきである。

即ちくだけて云ふと歌舞伎、新劇、舞踊、音樂會等あらゆる異種類のものを上演させるためにこれに關係する者はヂレンマに陷るのであつて常に何れともつかぬ不具者となり終ることは止むを得ない事であるが惜しい事である。

この意味から近代我國劇場にはこれ等の凡てを滿足させ様として果さず終に中途半端の形骸を街頭に暴露してゐる。

我が大阪の東の一角に聳立した鶴橋劇場は純和風であつてこの地方面としては立派なものである。

この劇場の特長は何といつても舞臺であることは力強い氣がする、舞臺がこの種のものとしては稀に見る廣い面積を占め俳優部屋もかなり自由に配置されてゐることである。

觀客席、階上正面の兩脇に階段を設け客席後方廊下に通じてゐることなどは理想的なものであると思はれる。

只花道の位置が北方に過ぎたために北側階上棧敷から余程視線に無理な點のあることは缺點である。

規模としてもかなり大きなものであつて平面が道頓堀、松竹座より約一割小さい位である。

敷地坪數　五二〇坪一八
建　坪　三六一坪八四
定　員　八四〇名
プロセニアム巾　五三尺
廻り舞臺徑　四四尺
設計及施工者　川邊幸治郎氏
劇場主　鶴橋土地株式會社

我が大阪市に於ても最早こうした規模のこうした構造の劇場が恐らくはこの鶴橋劇場を最後として影をひそめろであらうことを斷言して筆を擱く。



郊外住宅の窓より

郊外住人

×

家を建てるのに、能きるたけ高燥な土地が求められなければならないのはもとよりの話です。南のひらけた、四季ともに陽に明るい、いくらかのなだらかな傾斜をなしてゐる土地、空がいつも申し分なく澄んでゐて、曇つた日にもその空に不快な濁りのないやうな土地、即ち、曇りの日は曇りの日を、雨の日は雨の日をそのまゝに樂しめるやうな土地、能きれば近くに雜木林か竹林かの美しいのが常にのぞまれる土地、井戸水があまくて、澄んでゐて、澤山ある土地、町に遠からず近からずしてあまり不便ををかさなくてもいゝ土地、外にいゝ家があつたからからうなどといふ考へを起さなくていゝほど、とにもかへにも落ちつける土地、ひよつとして、たとへこの家で死ぬやうなことになつてもさうあはてなくていゝ位の土地——こんな土地に、安くて新しい住宅があつたらはいりたいと思ひ出してから、かなり長い時日が經ちながら、いまだそんな土地をも住宅をも見出し得ないまゝにゐます。

自分自身が長い間かゝつてかいた設計圖通りの住宅を建てながら、やつぱりそこにも、ゐあすればよかつた點を澤山見付け出さないではをれない私たちです。まして、私はこの七年間といふもの、全く同じ家でお正月を二度と迎へたことのない男です。指折つて見ると、今年で足掛け七年といふ間に、私は實に少く見ても十二度轉居してゐます。それが、下宿をかへるといふ程度の引つ越しなら、學生時代なら、誰だつて一年に二度三度動くことも大して憶怯でもありますまい。が、私のは少くとも所謂世帶道具を荷造りし、妻と子供とをはげまして眞面目に動いてゆかうといふんだから大變です。ある男は東京市中の十五區をせめて順々に住んで廻りたいといふ計畫を建てたと言ひますが、私のはひどい時には僅か五十日足らず住んでゐたゞけで、まだ、天井板が何枚あるか、障子の桟がどうなつてゐるかも覺え込まないうちなんですから大變です。肚の底から本根をはいてみますと、どうせ生涯を人の建てゝくれた家でしんぼうし通さなくちやならない自分なら、いつそ、すきな土地へいつてすきなやうに住まう、家もなるたけよさそうな、新しいのをさがして歩かう、向方が家主ならこちらは借家人だ、豆腐一ちうを買ふのにも安くてよい豆腐屋を探し

て歩きたい位のが人情といふもんだ、ちやあ、住まうといふ家だつていゝのがありやどんどん變らなければ損——といふ位の氣持であるにすぎません。

一人散歩してゐる最中に空家でも見付かると、直ぐ問題が起ります。初めはごく僅かな興味だけでその家の中をのぞき込んでゐますが、やがて、家主はどちらですか、なんかときゝ出したら、大低の場合、三十分もすれば早速自家へとんで歸つて、先づ本棚から片付け初めます。家族の者の小々位の反對はこの場合なんでもありません。私の友人にも仲々氣の早い人がゐますが、夕食後の散歩のついでに一寸のぞいてをいた家へ、その夜中に引つ越して來て、明朝はすでにその新居の二階の窓に依つてお茶を飲んでゐたといふのがあります。かういふ人たちには、引つ越しは大變なものだといふ常識はありません。あの家の方がいくらかでもいゝと考へれば、もうその家で住んでみなければどうも落ちつかなくなるのです。

×

住居意識といふやうなものが追々社會的に發達して來ますと、都市問題、町村問題として住宅問題が喧ましくなつて來ますし、家主と借家人との問題も仲々圓滑には動かなくなります。私の聞いてゐますだけでも、家主と喧嘩して金を拂はなかつたとか、出る時には自分の打つた釘は一本も殘さず引き抜き、自分の作つせてやるのかも知れませんが、借家人の方からですと、住ませてもらふのではなく住んでやるのだといふことになりますから大變です。

私の經驗から言ひますと、度々轉居するといふことは、住居意識を追々馴練してゆくことになつて、同じ家に不平をこぼしながら住んでゐるといふ氣持より、たしかに近代的な明るい氣持を味はふことが能きるやうです。よい近所を有たなければ、子供の養育上に於いてたちまち困惑しなければならなくなりますが、現代の社會の風調から押してゆきますと、ほんとうに交際しよい『向ふ三軒兩隣り』を見付け出すことは、小さな町村へゆきましても仲々困難です。近所づきあひを惡くしろといふのではありませんが、ほんとうに氣がを

歐洲の建築界

歐洲に於ける建築界と屋内の裝飾の近況を視察の爲め昨年の春渡歐せし宮内省の建築技師櫻藤要吉氏が先月十二日の早朝シアトルから横濱に入港した日本郵船の伊豫丸で歸朝した同氏の談【英國を初め佛國、ドイツ、オランダ、ベルギー、イタリー、スイツル、オーストリー等の諸國に於ける建築物に就き視察をしたが就中英國には四月より七月迄丁度社交のシーズンに滯在して居たから各方面に亘り詳しく視察をすることが出來たのは幸ひであつて各國を視察した結果英國の住宅の何とはなしに落つきのある處が今後日本の住宅に最とも適當して居ると思つた次に佛國の建築物は美術的であるから其氣持は取つてよいがドチラかと言へば實用には適せぬものが多い又ドイツとオランダの建築界には新しい傾向が生じて居り特にオランダはアパートメントが發達し所謂文化生活的のものが多いが其樣式は皆獨逸の流れをくみたものであり墺國は國共疲弊の爲に建築としては新しいものがないが學術的の研究は意外に進んでをり其設計圖や標本が澤山に巴里の博覽會にも出品されてあつたが同博覽會で最も多くの賞はいを貰つた國は墺國とオランダとであつた。

た寵はわざわざ出る日の朝家族の者皆んながたゝき毀したなんかいふのがよくあります。家主はまた家主て、家を勝手にさはつた人だつたら元通りにしてから出てくれ、でなければ出さぬなんかいふのがありました。家主の方からすれば住ま

けないで親しく能きる人々は、反つて遠方に住んでゐる信仰の友とか趣味の友とか同業の友とかいふべきものであつて、近くの人間は表面は毎朝『お早う』を言ひあふ仲ですが、どうも全くのところ油斷がなりません。私が一時住んでゐました或る町はづれの一劃では、あまりお互が氣安さうに出入した結果、米櫃の中の米野菜、乾してある着物までなくなり初めたので吃驚させられました。一人ではなく、數人の者が銘々こそかせぎをやつてゐたんですから見事です。『こんながらの惡いところはありません』と、唯一言いつた妻の言葉で、私たちはそこを『追ん出て』來たのです。それ以後、近所づきあひは或る程度にとめることゝいふのが私たちの哲學です。で、近所には大して心配もせず、かはりたい家へ思ひきりよく轉つてゆくことにしてゐます。何か生活上の更新をでもやらうといふ時など、私たちにとつて、よりよき家への轉居ほど役立つものはありません。自分の家を有つてゐる人には、その人相應の愉快さもあるにちがひありませんが、早速どこへでも轉つてゆける境遇にも仲の喜びが見出せます。海邊に住みたい時海邊に住み、杜のそばに住みたい時杜のそばに住み、東京に住みたい時東京に住み、横濱に住みたい時横濱に住むことが自由です會社の都合や商賣の都合でさういふことの能きぬといふ方があるでせう。やらうと思つて能きぬことはないといふのが私の意見ですが、それでも能きないとならば、商賣ご繁昌でまことにお氣の毒ですといふより外ありません。とにもかくにも、住居意識といふものを高めなければなりません。これが低い間、その人個人が非常な損をするといふことも勿論ですが、それではいつまで經つてもその人々の據りどころである市町村が發展しさうにありません。或る年老いた英人にきゝますと、彼が明治二十二年に大阪へ來た時、大阪の殆んどの町筋が廣くて二間位しか道幅がなく、その上眞つ暗らであるし言葉がわからぬし、まるで闇の中を歩いてゐる氣がしたさうです。あの頃から思へば、今の大阪は實に美しくよくなりました。唯、電車に人を詰め込むことが實に閉口です、乘合自動車をうんといふやすがいゝでせうとの事でした。

最近の京濱間、阪神間のすばらしい發展は、そのまゝ、住居意識の社會的昂上だと考へることが能きます。

×

人生がさう喧しく騷いでばかりして生きるべきところでは、ないといふことは如何なる都市病者も認めるだらうと思ひます。大都市の雜沓地を離れては唯の五日も生きてゐることが能きないといふやうな人は別としまして、私たちがやつぱり人間らしく靜かに樂しんでこの生涯の一日々々を送つてゆくに就いてはどうしても大都市の雜沓地からはいくらかの距離のある靜かな土地、そこが美しい田園であり、高燥な土地であればもとより申し分はありませんが、とにもかくにも、空氣のよい靜かな土地でなければならぬことは、誰にも考へ及ばれることだらうと思ひます。大都市の眞ん中から塲末へ塲末から郊外へ、郊外からよりよき郊外へと轉々して來た私の僅かな經驗に依りましても、最も住みよいのは、郊外の地の人家のわりに混んでゐないところです郊外の不便を人はわりに口喧ましく說きますが、水道線の來てないところは井戸水の不便位のものであつて、大低の電燈の點るほどの郊外にはすでに電熱器を用

ゐ得る便宜もあり、魚屋も青物屋も自轉車で廻つて來る位になつてゐますから、住んでみないで氣にかけるほどの事はありません。物價がわりに高いといふのは大半は買物の下手な主婦がその責を負ふべきで、だいたいに於いて、しんぼう能きといふほどのことはありません。毎朝驛まで通うのがめんどうだといふ人は、散歩のやうなものにまで少しの趣味も有てないほどの低級人で、さういふ人は初めから住宅問題などを云々する資格を缺いでゐます。汽車の中は汽車の中、電車の中は電車で立派に無駄でなく費すことができます。私の友人には毎日ある郊外の地から大阪へ通ふ車中で作つた詩や歌をあつめて毎年一冊づつ詩歌集を出してゐるのがあります。車中ですらすら作つたのが書齋でひねくつたのよりいつも出來がいゝのを例とします。また或る人は毎日通勤の車中だけで、ちつとも讀めなかつたドイツ語が讀めるやうになつたと言つてゐます。家族うち連れてたまの休日なんかに汽車や電車でもつて大都市へ買物なんかに出る時のなごやかな氣分は家庭生活なんてどうでもいゝと思つてゐる風來人は知らぬこと、一度は是非味つてみて悪いものではありません。そのうえ大都市の雜沓の中に居ては唯の取稅人も、郊外の地に住めばいくらかでも藝術家となることが能きます。如何なる物質論者も一度び大都市から郊外へ轉り住めば靈魂の輝きをしばしば見ることが能きます。忘れてゐた青空を發見し、逆いてゐに大自然の懷のあたゝかさがわかり初めます。自己を反省する機會が多く與へられます。自分自身を全く自分のものとしていつくしむことが能きます。ほんとうに人間らしく生きやうと思へば、時々は大都市の濁つた雜沓を忘れ、『金もうけ』のことを忘れる必要があります。

住居意識が追々健全な發達をしてゆけば、郊外生活が今よりも種々な意味に於いてしよくなることは當然です。郊外にはどこへいつても汚い溝があつたり沼があつたりするやう考へるのは、正當ではありません。都市計畫といふ思想も追々一般的なものとなりつゝあります。郊外がいつまでも汚い『片田舍』である筈がありません。郊外住宅の經營といふことはすでに重大な社會問題となりつゝあります。一個人や一會社の私腹を肥やすための郊外住宅は、いづれは社會全體から相手にされなくなるでせう。郊外住宅地域があちらこちらにできかゝりつゝあります。事實、郊外への轉住者はその交通機關の發達とともに非常な勢ひを以つて增加しつゝあります。郊外一般が住みよくならない筈はありまんせ。現在の或る程度の不備不便は、この將來の希望に依つて今少時しんぼうしても損ではありません。一體に靜かで、美しくて、健康上によくて落ちつけて、なんとなく住みよいといふだけでも、一度は郊外へ轉居してみるのがいゝかと思ひます。私たちが郊外へ住んでからすでに四年、私が健胃劑を廢してから四年です。郊外が好きになつてからも四年です。

×



本月から開場の

電氣大博覽會とその建築

松室重光

松室氏は、電氣博覽會の建築監督技師として、現にその仕事に執掌されて居ります。電氣博の建物は武田五一博士や松室氏の設計になつた最も出色のものが尠くありませんから、本誌にその竣成のものだけを掲げると共に、氏に乞ふて、本編を得ました。建築誌に於て逸疾く報導したことは恐らく本誌の外はあるまいと思ひます。　編輯者——

電氣協會の主催閑院宮殿下を總裁に戴き、愈々三月二十日より開場の電氣博は、會場の廣いことも、隨つて規模の大なること、蓋し大博覽會の名に背かないのであるが其會場は大阪市港區八幡屋町附近市立の運動場から路を隔てゝ西に横はれる土地を本體とし其右に運河を隔てゝ安治川土地株式會社が經營公開しつゝある遊園と、それから更に運河を隔てゝ西に廣がれる一地區及びそれ等の土地より田中元町通を隔てゝ北に在る地區合せて四地區合計五萬零參百貳拾參坪の地積を第一會場となし、天王寺公園の元の勸業館を第二會場としたもの。

第一會場の地積は本館所在地壹萬八千九百九拾五坪六合、遊園地帶參千九百四拾六坪、外國館、港溫泉所在地五千八百七拾五坪五合、保健衛生館第一餘興館其他を含める娯樂興行物地帶壹萬貳千壹百拾貳坪八合併せて陸地面積四萬零九百參拾坪五合、運河及小池の面積九千參百九拾貳坪六合を有して居ります。

これ等の土地は大正七年以降安治川土地株式會社が市街地として埋築して來たもので今猶可なりの大面積を埋立中でありますが既成の部分を利用しての經營で其上層六七尺は土砂、炭殻等で盛上げられたものですが下層は全部泥土で地盤としては至極軟弱なものであり地表面以下六七尺にして水面に達します。

敷地の中央を貫通する運河は幅二十間、之に將來の道路連絡用の橋を架設中で、別に本館所在地と遊園地との間を繋ぐ假橋を架設中。又其支線は幅十間にして此上に遊園より温泉に通ずる木橋壽橋が架せられ既に出來上つて居ります。更に其北に續ける水面には中央を島となして之に辨才天宮を造營し同處へ通ずる橋が建築せられつゝあります。

會場の經營は博覽會自らなすものと、安治川土地株式會社をして之を擔當せしめて居るものと、安治川興業會社の經營に屬するもの等とを併せて之を使用する事になつてをり、正門、第一事務所、本館交通館、動力館、實驗館、第一別

館、第二別館、參考館、西門、第一奏樂堂、家庭電化館、新聞記者倶樂部等を含める本館所在地には猶第二、第四休憩所、郵便局、職員詰所、案内所、携帯品一時預所及び二ヶ所の噴水や、無電放送設備や、農事電化の各建物温室等が或は建築せられ又は目下建築中であります。

遊園地帶には宮様の御休憩等の爲に充つる迎賓館と第二奏樂堂と之に中門が附屬して居ります、港温泉の所在地には水晶塔、外國館、殖民館、第六號噴水が設けられ、此地帶から田中元町の通りを陸橋で連絡して北方に移りますと其處に第一餘興館、屋外餘興場、第二號噴水、第三休憩所、保健衛生館第二事務所、電氣開閉所等の建物の外に諸種の興行的餘興施設がせらるゝ事となつて居ります。

以上の外安治川土地株式興行會社が經營する港温泉や、活動寫眞館や八幡座などの永久的施設が既に出來上り或は裝備中でありまして直接又は間接に博覽會に協同して働く事となつて居ります。

建築設計の概念＝從來各種の博覽會を支配して來ましたものらしく考へられるところの所謂博覽氣分――お祭氣分、即ち一時的であり、假設的であり、興行的であると云ふ樣な考へから來る其場限りの虚僞假托、粗末極まる建築をなして、屢々世の物議を招ける事を思ふと、之に携はる建築家は多少此事に顧念して何等かそれ等の雜念を排除して純眞なる立場から博覽會の建築に從事して見たいと云ふ念も起つてまいりました。

電氣大博覽會の主旨として現代人類の築き上げつゝある最大文化の完全なる表現を公衆の前に展し開て自他共に幸福を享有する爲には一時を糊塗する興行的氣分は全然排除して眞面目な立場から見る必要があります。

一切の内容に伴はざる空虚なる外觀的表現を排除した建築は頗る單純平凡であつて、電氣その物と其關係の智見開發に公衆を迷はさない爲に簡素な建築が寧ろ其用をなすかとも思ひまして、

建築の形式＝博覽會建築が劃時代的のものたらん事は尤も好ましい事でありますが、之をなす爲には相當の經費と施工の時日を要するに係らず、今それだけの條件の與へられざる時、無理に斯る表現に努力するも畢竟鶫的にして所謂虎を描いて猫に類したり又は狗と云つて仕舞ふ樣な面白からざる結果から脱却する爲、且つは會期短かく其終了後に於て直ちに撤却せらるべき建造物には可成的其失費の量の少なからん事を欲し、又其施工を容易ならしめんが爲にも簡素なる形式を擇ぶ事は必要と認めました。

これ迄、專門家でない一般の人々が從來の博覽會の建築に對して格別の感興を喚起しなかつた事は建築家としても又一顧するの必要があります、多數の人々は建築の外觀や形式美を觀賞したり批判する前にさつさと會館内に入り込んで仕舞ひます、勿論今日迄の博覽會建築には特に其建物に就て云ふ程のもの澤山なかつた樣に思はれますから當然の歸結であるかも知れません、今回の電氣博にいたしましても其建築費や建築時日の關係から專門家は勿論一般の人々に重く見て貰ふだけの施設は出來ませんでした。

で、多少の苦心と努力を費やしても、それだけの効果の擧けられさうもない仕事は可成省略する事として、實質簡素を主として建築した結果は御覽の通り全く平凡なものとなりました。

そこで、會館の主體は可成的共通的同一の形式及構造方法を執りまして、其基礎壁體窓戸の大さ形狀屋構、屋蓋等に於て同一のものと致しました。建物の梁間、軒高、屋根勾配も同一であります。之を異にしたのは家庭電化館、殖民館保健館衛生館などで、これ等は何れも特殊の位置に離れ離れに建てられたものであります。

今少しく之を細説いたしますと、

(第一は)正門及び右の袖塀

正門は内法九尺、高十五尺の三戸の拱間を一般の出入口として其左右に方九尺の賣札場を設けました建物の高さは中央の門が二十二尺七寸、左右の塔屋が二十九尺四寸で、一寸ミツション風に擬して見たのですが屋根瓦や棟の飾などは似て非なるものです。壁の色は帶赤、淡黄色としたのですが、最早大分煤煙の爲に汚濁せられました左右の袖塀は明き六尺、高さ八尺の拱口を有し總高十尺の連續で、其控柱の上部を直ちに裝飾柱とし

で利用する考へです、壁の塗色と門と同一ですが其拱門の紋章だけは自地の輪廓に樺色のものを石膏抜きとして貼付しましたが、やはり汚染して居りますので充分の効果を發揚出來ぬ事となりました此袖塀の一部を利用して案内所、携帶品預所、賣札口四ケ所及自轉車預所を設けるので只今工事中です

(第二は)本館梁間八間、桁行延長一百間二尺の矩形で、軒高正面二十一尺五寸、側面及背面十九尺五寸、屋根勾配五寸中央に一列の柱を立てました、四面の出入口は中央が正背面とも各内法六尺の三戸、左右及背面のものが九尺及六尺で、交通館及第一別館への交通口が各内法六尺の二戸、窓は六尺の半圓形其高さは地表上十三尺五寸の處です、此建物は實驗館、第一別館と共に當初内部の出陳區を四列として交通路が二條の豫定でありましたので柱列を設けて屋構の支持を簡易にする考へでありましたが、其後出陳の方法が變更せられました爲に中央の柱列が全く無意味となり邪魔物となりました建物の形式は其正面に於てのみ幾分の模擬ミツション風とでも申して置きませう、これも屋根瓦や拱の形や其他の細部が期待したものに出來上りまんでした爲に餘り見榮もいたしません、壁の塗色は門と同樣、但し其正面の入口は濃淡三樣に變へる豫定でしたが色の濃度が僅少であつた爲に結局は單一色に見えます。

(第三は)交通館と動力館此二館は桁行二十五間、梁間八間中央柱なし、僅に其正面及兩側の入口の廻りを幾分飾つて見たのですが結果は御覽の通りです、形式としては先づ東洋風の意味が加はつたものとでも申して置きませう。

(第四は)第一別館梁間同前、桁行三十間、建地二百四十坪、内部中央に柱列があります、入口が一寸變つてをります。

(第五は)實驗館梁間同じく、桁行は十四間建坪は百拾二坪、内部中央前同、入口のみ稍形を異にしています。

(第六は)第二別館梁間同じく桁行三十七間半建坪三百坪、内部中央一列の柱建入口のみに於て其形を異にする外他に特異のものはありません。之は當初參考館として建てたのでしたが出品が超過した結果

(第六は)參考館が出來たのです大さは第二別館と同じですが、内部の柱列を廢しました、其正面入口の形式は本館正門と稍似たもので屋根瓦だけを變へました。

以上各館は其構造形狀略同一で、床は何れも煉瓦敷目漆喰塗、各館ともに屋根裏板の肉面を胡粉塗として天井は附けませんでした、從つて此内部の電飾配線は露出工事です、猶此等の建物の屋根は何れも寄棟造り、亞鉛鍍波形錯板葺ペイント塗で、天窓棟飾等は一切省きました。さて此等の館は其側窓によりて内部の採用光をなすのですが出品棚の意匠が種々大規模のものが出來て、窓の効用を沒却したのが多くあります、無論晝間でも徹底的に出品の内容の表示を期する爲何れも電照をなす事となつてをりますから寧ろ窓は外觀的な飾りに過ぎないものとなりました之は將來の博覽會建築には軒高をうんと高くして窓をつけるか、或は側窓を全廢して屋根全面を玻璃張となす方が面白くて効果のあがる事と存じます。

(第八)外國館梁間八間、桁行延長參拾七間半、建坪參百坪、内部中央一列の柱を有し、歐風復興式の普通のもの、其正面出入口左右の塔屋の下方に獅子口を設け噴水せしむる豫定です、此館の構造は大體前記のもの等と同樣です。

(第九)家庭電化館梁間五間、桁行貳拾貳間、建坪壹百拾貳坪の短形で、之は窓軒先等に於て他の建物と幾分其手法を異にして居ります、内部は或大さの居住の室に區劃模造して家庭に於ける電化の實例を展開する考へです、床は練瓦敷で、天井はありません。軒高は拾八尺です。

(第十)殖民館桁行貳拾間、梁間六間、建坪壹百貳拾坪の支那日本折衷の東亞風と云つた建物外部の柱、貫、其他の木部破風等には着彩、屋根も擬瓦葺鐵板張でペイント塗、共軒の出は七尺五寸、軒高拾七尺、内部天井なし床は他と同じく。煉瓦敷

(第十一)保健衛生館桁行四間梁間拾五間、正背面入口の突出部を併せて建坪六萬參坪、軒高拾七尺八寸、其外觀は他と少しく異なつてをります。

右に擧げた三館は何れも窓は矩形で、特に取立て、云ふ程の點はありませんが軒先きの手法や、飾りや、柱頭など稍變化してをります上記各建物を併せて出陳館の面積貳千七百五拾九坪、構造は何れも軸部木造の堀建で、地中根入參尺柱間各五尺屋構の間隔同上大抵は矩形で屋根は寄棟壁は內外部共に素地竪簀張の上眞土入漆喰塗壁塗腰は參尺通セメント入漆喰塗で、窓は一重、其一部を開閉出來得る裝置としましたが他の一部は嵌込の儘です、出入口各扉は外開き、內法九尺の物に限りて四枚折、床は何れも煉瓦敷で天井はありません、屋構其儘を胡粉塗として別に裝飾する筈です。

此等の建物は當初鐵骨造たらしめやうと云ふ考へもありましたが準備が出來兼ねたので木造の假設としたしました、何れも博覽會百日の開期終了後は撤却なる豫定です博覽會の主體以外の建物としては

第一事務所即ち事務局へ之は七拾五坪五台の平屋で、正門の右脇に位置されています、事務會計、會議、事務長、應接、電話交換、宿直、使丁室の外に便所を併せ構造したもので別に云ふべきことはありません。

第二事務所 桁行七間梁間六間の矩形。中央を廣間として四方棧敷つき、入口の右は之に昇る階段左は化粧室及便所で、建坪併せて四拾貳坪、公共團體や特種の學校生徒等の爲に講演の用に供し兼ねては休憩所にも充つる見込です。之之は基礎コンクリート打、腰廻り煉瓦積、軸部木造、屋根セメント赤色瓦葺で、小屋は化粧、軒高は貳拾壹尺上層棧敷の周圍の星狀窓には色硝子を嵌込み、下層の窓は矩形並硝子張、床は木造です。

（第三は）迎賓舘 桁行七間梁間六間、建坪四拾參坪五合の矩形の建物で。軒高拾參尺八寸、外部に可なり太き圓柱形を有する單層のもので、腰は煉瓦積上部木造、屋根平鋲板張。內間を應接室、控室給仕室、廣間及貴賓室に區劃したるもの。外部壁は圓柱を帶褐赤色地を淡黃に着彩し、玄關の障子は朱廣間及貴賓室の腰羽目、窓額緣等は稍黑味を帶びた褐色、天井は白漆喰塗、屋根はペイント塗でやはり一種の東洋風を意示した建物とす遊園地の壇に半ばかゝつて建てました。

（第四は）第一奏樂堂 半徑拾五尺の半圓形の平面を有する、球體を截ちたる形。軸部は木造で、柱堀建て、床木造板張。周壁は外部正面は木摺漆喰着色塗、背面は鐵板張ペイント塗で、正面を開放し屋根は段形に刻みてセメント綠色瓦葺、壁は帶黃赤色、額緣の唐竹は着彩したものです。此音樂堂は特別に照明することゝなつて居ります。棟高は中央で貳拾參尺五寸です。

（第五は）第二音樂堂 之は遊園地內に建てられたる木造の無蓋の八角形で、其半徑は拾五尺、軒高拾六尺八寸、腰廻りは鐵網張人造石洗ひ出し塗、四方手摺付、床板張木部はペイント塗の上桁、柱、擴の端等に多少の着彩をいたしました、周圍に置きました獅子狗形は母胎を摸した漆喰細工です。

（第六は）第一休憩所 之は被蓋の半徑拾壹尺貳寸の傘形でありまして中心柱は合成で傘骨支持等の用をなすもの、總高さば十七尺、屋蓋は平鋲板張ペイント着彩、下部牀面は土間コンクリート叩き、腰掛は木造です、興業物地帶高塔の前にあります。

（第七は）第二休憩所 四本の合成圓柱人造石塗のものを以て蔓棚を支持するもので、被蓋の半徑は拾貳尺床面コンクリート叩き、各圓柱の前に高參尺方參尺の花臺を設けまして其上に生花の鉢人造石製を置きました、高さは棚上迄拾五尺で、休憩所二掛は別に置くものです、外國館の前にあります。

（第八は）本館等の一廓の內庭中央にある第三休憩所です。方參間九坪の木造柱建で、屋根は緩き勾配、屋擴の制で、平鋲板葺軒出六尺、軒高拾壹尺、床は土間叩き四半目地切入れ、四面開口の周圍には腰掛を置き壁は色漆喰塗です又軒先きには漆喰唐竹彫刻を附けました。

（第八は）實驗館 と參考館とを連絡する廊下の間に介在して居ります**第四休憩所**で、其桁行は五間、梁間は壹間半軒高は拾四尺軒先のみ瓦葺、其內部は平鋲板葺下部は屋根裏板を其儘の化粧天井となして、床は土間叩きセントモルタル塗目地切り、周壁は內も外も色漆喰塗として中央に腰架を設けました。

（第九は）**西門**築港方面より來る人々の爲に設けたもので、中央明き拾八尺之を一般の出入口とし其上を赤色擬瓦葺の屋根で覆ひました。左右に方七尺貳寸の賣札場を設けました、此合建坪貳坪九合塔屋の高さは貳拾參尺五寸五分で擬相輪形の銕板張棟飾や其下部に方形の飾窓が設けられた小さな規模のものです。

（第十は）**中門**　遊園地の北の入口です。中央明き拾尺、左右各四尺參寸四本の角柱方貳尺五寸及四尺五寸のものを樹て頭部は拱形、總高貳拾四尺五寸、木造堀立、葭簀及木摺張漆喰塗着彩仕上げのものです。

（第十一は）其對面の興業地帶への入口たる**東門**。中央明き九尺高さ拾壹尺五寸、左右明き四尺四寸高さ拾尺貳寸の開口を有し之を出入口とし、其左右に三角形の平面一邊八尺五寸、側邊は拾壹尺五寸の賣札場を有してをります。門の總高さ貳拾七尺八寸、中央頂部は擬瓦葺、賣札場の屋根は銕板張です。

（第十二は）**北の門**　幸運橋の北田中元町の角に明けられたもので中央拾壹尺左右各四尺八寸の出入口を有し其總高さは貳拾尺で、左右の賣札場は不定四邊形木造堀建木摺打漆喰塗着彩の仕上げです。此等の諸門は從來の博覽會に於ける大規模の威壓的な莊麗なものとは全然其趣を異にし極めて質素な實用的に造つて見ました。門の大さや形でお客さんを呼ぶと云ふのもどうかと思ひました。

上述の外に**第一餘興舘**を港温泉の對向に建てました、其大さは桁行拾六間、梁間拾貳間の本體に桁行八間梁間參間の樂屋と他に立關及便所を併せて貳百餘坪のもので軒高貳拾貳尺七寸、基礎を鐵筋コンクリート、軸部を鐵骨とし壁は鐵網コンクリート着色塗仕上げ屋根は石綿瓦葺内部は下部土間コンクリート叩き舞臺に向ひて緩勾配を有し、上部は三方棧敷附賣札場階段便所賣店、樂屋及オーケストラツビを有する小劇場です此建物は博覽閉會後或は部分的に補修して殘すものとなるかも知れません其外觀は先づ近代獨乙式とでも云ふた程度のもの、收容人員は階上下を併せて約壹千人の豫定です。只今では座席等は假設のつもりです。

猶別に**屋外餘興場**と稱する壹棟貳拾六坪餘のものがあります、前面は幅壹間高拾尺の開口で舞臺床木造、外部漆喰着色、屋根緑色瓦葺とし、少さき樂屋、便所等を附設したものです。

此外目下建築中の**噴水塔**が大小四基、**農事電化の温室や郵便局や電氣開閉所や職員の詰所新聞記者倶樂部**と**無線放送設備**があります。

最後に本會建物として**水晶塔**と稱する一棟の噴水塔を建築中です之は中央運河に面して塔基面參坪五合、高さ水晶球體の尖頭迄九拾四尺四寸、四面隅角各一ケ所及四隅各一ケ所宛の三段の挫柱形を有してゐる、基礎コンクリート軸部木造で、周壁は外面上部は色漆喰塗、正面水の流下面は五段にして各鐵骨硝子板とし各段夫々落下水を湛ふる水盤を有し電照によりて種々なる形に瀧を落下せしむる裝置です、頂上の水晶球體も又硝子張です。左右の翼廊は各桁行外面七拾貳尺、内面五拾七尺、梁間拾八尺中央塔との取合六尺四寸で拱口連續し下部勾欄の脇には花壇付で軒は瓦葺です、此翼廊は多分休憩所に宛てらるゝ事となりませう、塔は最初登臨展望の用に供する考へで昇降機を据ふる豫定でしたが高塔が別に出來ますので目下は使用せぬ事となつて居ります。



俳壇

春風・足袋

齋藤溪舟選

春風や日の輪の下の山かづら　同
春風や渚の小草日に青む　同
春風に背を孕ませて羽織哉　白甫
洗場にあがる水嵩や春の風　同
春風や芽柳に鳥きては鳴く　同
春風や廣野晴れたる湖つゞき　春滂
妻子らと耕し暮れぬ春の風　同
春風や藪あさりゐて空氣銃　同

奈良にて

芝に臥す鹿まだ寒し春の風　素秋
春風に麩うでけば鯉は跳りけり　同
春風の奈良寂しさよ鐘曇る　同
春風や水嵩増したる水車　朧月
鋤く人に土の香親し春の風　同
山の尾に酒旗うごきて春の風　曦村
野餘りの春風水にわたるなり　同
春風や女交りに野崎道　保月
春風や紙の飛行機松ヶ枝に　同
捲上げて藻いきれ立つや春の風　智美子
村社の棟上る日や春の風　同
春風に庭ありくなり病起柱津
春風に髪吹れつゝ裏山へ　唯山
窓あけて遠山青し春の風　流影

投句を歡迎す

◎課題　『陽炎』(かげろう)又は糸遊
　『猫の戀』各五句まで
◎期日　三月二十日
◎届先　北冨堂ビル三階日本建築協會

足袋

藏の間の日當や竿に足袋乾せり　朱廊
白足袋に下駄新しき門出かな　同
脫ぎすてし泥足袋凍る戸口かな　同
白足袋の母送り出す玄關かな　同
白足袋のわづかに沓の庵主哉　未乾子
傳言を聞きつゝ足袋を穿にけり　同
丹念に白足袋洗ふ尼せかな　同
乾足袋の日影しづかや雀飛ぶ　同
吊乾の足袋影りある障子哉　白市
足袋脫いで日の椽に坐る快氣哉　同
古足袋の尙かゝりある枯木かな　同
泥足袋をぬいで寢床に入にけり　春滂
宵闇に白きもの竿の忘れ足袋　同
枕元の赤足袋や子は熟睡せり　眉山
亡き人の古たびもある包み物　同
おか足袋に椙木を蹴こむ焚火哉　保月
足袋ぬいで爪切つてゐる日向哉　同
明り窓に寒き日射しゃたびをほす　素秋
日の椽に足袋綴りゐる眼鏡哉　同
洗足袋の紺の雫や庭草に　竹志
足袋も浸けて洗濯物や大盥　同
自動車よけて白足袋に埃厭ひけり　唯山
蒲團めくりて幼な子の足袋脫がす　朧月
足袋もはかで子は出て行ぬ裏道　村津
江の晴や船べりの足袋日に乾く　智美子
還暦の赤足袋赤の鼻緒かな　千靈

春風

春風や日に膨みてもやし獨活　朱廊
染干の絹糸かわく春の風　同
春風や二階に縫へば樹々明し　同
春風に縋れて犬の駈けるかな　同
苔青き大水甕や春の風　未乾子
春風や人なき濱の松あかり　同
水こぼしゆく老樵や春の風　同
春風に加茂の堤を下りけり　同
春風に門の柳はゆれにけり　眉山

俳話 寫生の句

溪舟

◎私は是まで幾度も云つた如く、私はむしろ未成作家の投句をより多く歡迎する、本誌の投句家の内、朱廊、未乾子二君の如きは、すでに堂に入つた作家であつて、御覽の如く五句の内四句を選拔したのによつても、如何に兩君は他に比して優れた力量を有してゐる人であるかを知ることができるであらう、故に多くの投句家の人々は、よくこの兩君の作句について玩味することなどは無用の事でないと思はれる。

◎しかし、兩君と雖も完璧の句のみを作しうるといふことはできないであらう、私は未乾君の「白足袋のあらはに沓の庵主哉」を「わづかに沓の」としておいた、これは作家の考へでは、庵主が白足袋をはいた上に沓をはいてゐた、しかしそれにも拘らず、白足袋がよく(所謂あらはに)目についてゐるといふのであらうと思つた、さうだとすると、その場合「あらは」は當らぬことになりはせぬか、あらは、といふのはムキだしといふ意味のものであるから、沓をはくべき場合に、それをはかず白足袋のまゝまで出たといふならば、あらはでもよいが、すでに足袋の上に沓をはいてゐるのであるから、わづかにその白足袋が見えるヲイと云つた方が當つてゐるであらうと考へる。

◎しかし、未乾子君が別のお考へで作句したものならば、それをお告げ下さい。

◎朱廊君の「藏の間に日當る竿や足袋をほす」を「藏の間の日當りや竿に」としてある、これは原句では竿にのみ日が當るやうにもうけとれるので、寧ろ「藏の間の日當り」としたものである。

◎朱廊君も別にお考へがあれば何うか申越されたい。

◎次の課題について、初心の人のために蛇足ながら說明を附加しておく「陽炎」は、春の日に、少し隔つた處にある物を「木でも石でも家でも何んでも」見ると、日光などの加減で、火氣のやうなものが立てつ、物體が小きざみに波打つやうに見える即ちかげろうの事である、石にも水にも木にも立つ。

照りつゞく日や陽炎の芝うつり　史邦

陽炎のもえて田にちる椿かな　曲翠

陽炎や小磯の砂も吹立す　其角

陽炎も見えて雨ふる野中哉　五石

陽炎や汐の引たる岩間より　柳至

◎次手に「猛の戀」の作例も四五句のせておく

猫の妻竈の崩れより通ひけり　芭蕉

猫の戀なく〳〵食を喰にけり　反成

羽二重の膝にあきてや猫の戀　友彦

京町の猫通ひけり揚屋町　其角

ひつそりと更し家並や猫の戀　馬山

◎句を作るのに禁物は臆病なことである、句に成らぬを氣づかふ事をやめて、兎に角、考へついた事を十五字でも二十字でも並べてみることである、それで、その上に徐ろに訂正してみるがよい。

◎私は本誌で句を選んでから、すでにやゝ長い間になるが、諸君の句境は追々と進歩してきてゐることは間違ひない、この機を逸せず、一段の努力が肝ちんである。

◎初心の人は、句を作るのに材料に窮するらしい、そんな時は何んでも眼にふれるものを寫生的にやつてみる事だ。

◎物乾でも、露臺でもいゝ、さういふ處から春の町を見わたした時、川の岸など歩いてゐる時、橋の上、街路、吹く風、雨、郊外、田舍の垣根、路や田圃——何んでもとつてきて、春の雪、春風、陽炎、春の夕などへ何うにかクツ付けてみるといゝ

川ぞひを歩いてゆくや春の風
街路樹はまだ青まぬや春の風
垣の外の小流れ芹をつみにけり

といふ風に何んでもかでももつてきて、兎に角春の景物へくツつけてみる、それが少々理屈に合つても合つてゐなくてもいゝ、さういふ風にしてゐるうちに追々と見つけ處が敏活になり、俳趣自から胸臆に動いでくる。

◎初めから完璧の句を作らうなどゝ氣どつてやると失敗する。これは私も經驗があるのである。

◎恐らく如何なる俳人でも、最初からうまかつた人は一人もない筈である、諸君は努力一つで、諸君の中から虛子でも碧梧桐でも生む事ができる、よし虛子碧梧桐たらずとも、一の俳人として、あるひは俳趣を解する人としてその生涯をどの位ゐ趣味づけるか知れない。

◎私はいつでもいふやうに、強いて俳人になる必要はない、たゞ俳趣を解しうる人になり得るといふ事は我々の窮極の目的でありたい。

◎私は諸君に、切にまづ寫生的の作句をお勸めする。

本誌定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

（毎月壹回一日發行）

大正十五年二月三十日印刷
大正十五年三月一日發行

大阪市東淀川區中津町一九八番地
發行兼編輯人 江村恒一

大阪市東區內淡路町一丁目卅一番地
印刷人

印刷所 大阪活版所
大阪市北區堂島濱通一丁目一番地堂島ビルヂング

發行所 日本建築協會
電話北四二九一番
振替口座大阪三九九七五

特約販賣店 大阪市西區京町堀羽子板橋北
柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八四番

日本建築協會會報

會報

一、會則一部變更の件

本協會一月例會及通信決議に依り會則の一部を左の通變更することに可決し來る三月一日より實施することになりました御了承を願ひます

會則第二十條第四項中「普通賛助費年額金六圓」とあるを「普通賛助費年額金九圓」と改む

一、建築士法案調査委員會委員依囑の件

建築士法案調査委員會委員一名缺員となりましたので今回福永佐和吉氏に同委員を依囑致しました

會合

○建築士法案調査委員會

△日　時　一月二十五日午後四時三十分——六時

△會　場　大洋軒東別室

△出席者　委員長　古宇田　實

委　員　大倉直三、小笠原鋼

小川安一郎、横濱勉

高木眞太郎、津田敏雄、村野藤吾、

理事長　園部文雄

△記　事　一、夕食後日本建築士會作成の建築士法案に付各委員の意見交換をなし次回委員會より同會作成に係る草案を基礎として研究調査をなすことに方針を定む

一、委員德政金吾氏東京へ轉住に付補缺員指名方を理事會に要求することに決す

一、波江悌夫氏公私共に多忙の爲委員辭退の意嚮あるも留任勸誘することに決す

一、次回委員會を二月十五日開會すること

○例會

△日　時　一月二十五日午後六時　九時

△會　場　大阪市中央公會堂中集會室

△出席者　園部文雄、小津利一、國藤武和田貞治郎、山本春水、澁谷五郎、松岡繳江、須川廉太郎、小笠原鋼、池田谷久吉、光安梶之助、渡貫幸、松本禹象、横濱勉藤枝艮一、高木眞太郎、福澤谷藏、古宇田實、村野藤吾、兒玉廣太郎、吉井長七、柴田四郎、小川安一郎、酒井勇三郎、津田敏雄、大倉直三、八木幸次郎、高橋君三、高田利一郎、

（次第不同）

△記　事　一、定刻園部理事長開會を宣し松本舊理事長より昨年理事長在任中の謝辭及理事任期二ケ年間の本會經濟狀態及之れに對する希望其他を述べられ退任挨拶あり次いて園部新理事長の就任挨拶ありて直に座長席に着き例會に入る

一、先つ和田主記より大正十四年度の事業報告あり次に澁谷主計より大正十四年度收支決算報告及説明あり一二名の質問ありて承認となる

一、右了つて澁谷主計より大正十五年度收支豫算に付報告説明あり横濱氏其他四氏の質問應答ありて同報告は了り小川主記より會務報告あり

一、是より愈々議事に入り左の件に付議することとなる

會則一部變更の件

會則第二十條第四項中「普通賛助費年額金六圓」とあるを「普通賛助費年額金九圓」に改むること

然るに本夕出席會員數は二十九名にして細則第十七條の所定數に滿たざるを以て園部議長より其旨を傳へ本議事は假決議とし更めて通信決議によることゝし先つ内容を説明して討議しては如何と衆議に諮り賛成を得たり

是に於て光安理事は本案提議の理由を説明し、横濱氏、澁谷氏其他の賛成説、村野氏の雜誌に付ての意見等論議する處あり結局全員の賛成に決したるも入員所定數に滿たざる爲通信決議となすことに決し閉會を告げたり

○定例理事會

△日　時　二月八日午後五時——九時三十分

△會　場　本協會會議室

△出席者　園部理事長、和田理事、澁谷理事、須川理事、光安理事、池田谷理事、八木理事

△報　告　一月分會計報告

△議　事　一、二月例會に關する件

本月例會は出席者の便を計り補助會費を徵收して晩餐の準備するとにし左の通決定せり

一、時　二月十八日(木)午後六時

一、所　大江ビルヂング大集會室

一、順序

1、晩餐

2、講演　中歐の建築界に就いての所感

上野伊三郎氏

3、會務報告

4、活動寫眞

一、普助費助費改正に關する通信決議の件

普通賛助費年額金六圓を金九圓と改正に關し通信決議により全會員に諮り賛否を徴したる結果左の通にして可決のことに決す

會員總數　三九一名
賛成者數　一六一名
不賛成者數　二二名
賛否回答なき數二〇八名

右實施期は本年三月より行ふこととし普通賛助員に對する改正通知案可決

一、實費精算式施工契約書及同規定草案に關する回答の件

今回右の件に付建築業協會長より本協會の意見を求め來りしにより協議したるも長文なるを以て寫を各理事に配付し次回理事會迄に研究し然る後協議の上意見を定むることに決す

一、其他左の諸件に付協議せり

1、會誌寄贈先取調の件

2、建築士法案調査委員會委員一名補欠指名の件

3、構造計算調査委員會委員一名補欠指名の件

4、關西工業聯合會に對し新年宴會不足金及經常費負擔金支出に關する件

一、土木建築資料總覽及職業別信用調査錄購入に關する件

一、會員銓衡

○構造計算調査委員會

△日　時　二月九日午後六時——八時三十分

△會　場　本協會會議室

△出席者　委員長　增田清、幹事大野直平

委　員　今林彦太郎、池田宮彦、渡邊圭吾、田邊平學、黒田茂、青柳貞世、酒井勇三郎、鹽路悳吉

一、經費と時間との節約の爲協會に於て委員の夕食をなすことを廢し節約したる經費を以て調査費用に當つることに申合せ次回委員會開催通知に追記して全委員に周知することに決す

一、セメント試驗成績表及同試驗規定蒐集に着手することに決し先つ左の通分擔を定めたり

1、大阪市立工業研究所及大阪工業試驗所へ各セメント會社のセメント試驗成績表（但し最近のもの）を理事長名を以て協會より送付方書面照會すること

2、住友合資會社セメント試驗成績報告

池田委員に委託

3、獨、日、米のセメント試驗規定

田邊委員に委託

4、英國のセメント試驗規定

今林委員に委託

5、住友合資會社のセメント試驗規定

池田委員に委託

6、大阪市のセメント試驗規定

大野委員に委託

一、會誌申論說欄の次へ構造計算調査委員會報告の欄を設けられんことを理事會に要求すること

一、左記の報告書を引續き購入方を理事會に要求することに決定

震災豫防調査會報告書

○建築士法案調査委員會

△日　時　二月十五日午後五時——九時

△會　場　本協會會議室

△出席者　委員　小川安一郎、横濱勉、津田敏雄、波江悌夫、野呂長四郎

△記　事　一、日本建築士會作成の建築士法案に付て意見の交換をなし茲に新しく我協會としての法案を作ることに決し參考として既成の日本建築士會作成法案に付て批判を試みることとなり該案の第一條より逐條的に研究して全部の批評を終り散會せり

○緊急理事會

△日　時　二月十六日午後五時——八時三十分

△會　場　本協會會議室

△出席者　委員　片岡會頭、宗副會頭、園部理事長、小川理事、須川理事、池田谷理事、八木理事、酒井理事

△議　事　一、社團法人設立許可申請に付大阪府より諮問に關する件

大阪府より諮問の條項と申請の定款とを對照して訂正事項を研究し意見の交換をなしたる結果先つ本定款起草委員の一人としての關係上横濱勉氏に依頼し内務省に出頭して當局と接衝し了解を得たる假成

案を作ることに可決し横濱氏には園部理事長より依頼することに決す

一、會員銓衡

○臨時理事會

△日　時　二月十八日午後四時三十分―十六時

△會　場　本協會會議室

△出席者　宗副會頭、和田理事、小川理事、澁谷理事、須川理事、酒井理事

△議　事

一、理事長代理者の件

園部理事長病氣缺席に付本夕の理事會及例會に於ける理事長代理に付て協議し小川主記代理となることに決定

一、入會金免除に關する件

當協會の社團法人となることも追々近きたるを以て此際前例に倣ひ入會金を免除して會員を募集するの議起り其期間は例會決議後より五月末日迄とし若し此期間中に社團法人設立の許可を得たる場合は直に免除を廢することとし本夕の例會に緊急動議として提出することに可決せり

一、其他左の諸件に付協議せり

1、實費精算式施工契約書及同規定草案に關する回答の件

一、會誌寄贈者取調の件

一、本夕の例會に協會員外の入場希望者に關する件

一、會員銓衡

○例　會

△日　時　二月十八日午後六時――十時

△會　場　大江ビルヂング大集會室

△出席者

講演者　上野伊三郎

會員及賛助員（次第不同）

池田長太郎、石川寛三、池田谷久吉、伊藤宗太郎、岩尾安衛、伊藤正文、羽原德衛、錦織喜代次、富田宗七、友淵義延、遠山勇吉、岡本新次郎、小川政次郎、大塚熊吉、小川安一郎、奥村伊次郎、岡崎與一郎、大武美德、大森烏藏、遠田音吉、渡邊家三、川野平造、加藤一俊、永井義方、吉田健治、多田七五三一、高田利一郎、高橋君三、宗兵藏、中西六郎、永田三次郎、中谷榮藏、波江悌夫、中西徹、武藤甚右衛門、村野藤吾、内浦寅吉、植松與右衛門、植村佐則、野村理一、山中茂一、山口正、矢木英夫、山本春水、山本潔、松本儀八、丸山正吉、前田清二、福澤谷藏、福井福、藤田友太郎、古橋剛丸、久村義太郎、小寺彌一、荒川貫直、酒井勇三郎、左谷米三郎、佐藤佐、佐野謹三、桐田登、城口龜吉、鹿村萬吉、篠原實、廣岡峯太郎、森本藤吉、須川廉太郎、菅谷元治、中尾保、大澤幸平、中村源太郎、和田貞治郎、久保田筆雄、澁谷五郎

（計七四名）

△記　事

一、定刻に遅るゝこと半時間一同食卓に着き晩餐を共にし食後直に小川理事長代理開會を宣し和田主記より會務報告アリ

一、次に小川理事長代理より緊急動議として當協會の社團法人となることも追々近きたるを以て此際入會金を免除して會員の募集を行ふの件及其免除期間は決議後より五月末日迄とし若し此期間中に社團法人設立の許可を得た場合は直に免除を廢することの件に付提出あり緊急動議成立したるも會員の出席人員所定數に滿たさる爲之を通信決議に依ることを諒り多數の賛成を得て議事終る

一、之れより講演に移り小川理事長代理は講演者上野伊三郎氏を紹介し同氏は左の演題の下に時餘に渉る講演あり

中歐に於ける建築界に就いての所感

一、講演後三四名の質問ありて上野氏携帶の活動寫眞映寫により中歐の建築物に付て委細說明ありたり

一、右了りて小川理事長代理は一同を代表して講演者に對し謝辭を述べ一同拍手を以て之に和し近來稀なる盛會裡に閉會を告けたり。

○新入會會員及賛助員

會員の部

青柳和貴男君　大阪市東淀川區三國本町三四

古都　猛雄君　地方會員の部　福井市日之出中町市營住宅

友淵　義延君　普通賛助員の部　京都市下京區三哲通堀川本入

佐藤　佐君　大阪府南河内郡高鷲惠我莊

松尾　庄二君　大阪市西區西道頓堀通住友ビル宇部セメント會社大阪出張所

田口　正治君　山口縣宇部市宇部セメント會社

大武　美德君　大阪府泉南郡貝塚町

○退會會員及賛助員

地方會員の部

澤原　隆夫君

特別賛助員の部

伊藤　清造君

普通賛助員の部

高柳壽三郎君　齋藤基二君　川端喜三君

○住所勤務先移動

會員の部

五十嵐芳雄君　兵庫縣武庫郡住吉村丸ノ後

大倉　三郎君　京都市東山妙法院北門前音羽園内

野村　理一君　大阪市西區西道頓堀佳友ビル三階池田建築事務所

藤本賢太郎君　神奈川縣鶴見町驛前龜屋内

小川　久市君　大阪市西成區粉濱町五六三

烏村佐次郎君　大阪市天王寺區生玉町七一

地方會員の部

北山龜太郎君　東京市芝區三田四國町三ノ一七四條方

特別賛助員の部

武安　笑吾君　東京市本所區兩國復興局第四出張所

普通賛助員の部

影山　丈夫君　兵庫縣飾磨町大濱四八熊野方

石原　政三君　東京市深川區古石場町一一

大山　啓次君　廣島市第五師團經理部工務科

細川　正君　京都市岡崎圓勝寺町四一

藤井邸大林組仁王門出張所

大倉　荒吉君　京都市先斗町通三條下ル先斗町歌舞練習場大林組先斗町出張所

藤原　節雄君　東京市麹町區永樂町二ノ一鐵道省構内大林組鐵道省出張所

小泉　吉明君　大阪市港區市岡町二九二ノ六根來方

手賀　謹次君　大阪市西成區玉出町田ノ川九〇一

田北　義光君　神戸市長田宮川町一ノ三三

役員及職員

會頭　片岡安

副會頭　宗　兵藏

理事長理事園部　文雄

主記理事　和田貞治郎

同　理事　小川安一郎

主計理事　澁谷　五郎

同　理事　須川巖太郎

編輯理事　古塚　正治

同　理事　光安梶之助

同　理事　池田谷久吉

同　理事　八木幸次郎

同　理事　酒井勇三郎

編輯係

江村　郊郵

藪田夏治郎

庶務係

西谷　節

鷹取　陽

會計係

大和　榮衛

山口　スエ

會員	三九一	會員（地方）	一七八
名譽賛助員	七（）	終身賛助員	五四
特別賛助員	二六	普通賛助員	五〇九
合計（二月二十日現在）			一二二八

●第九集　第三号　掲載広告一覧（掲載順）

飾磨化学工業
大野正営業所
日本エレベーター製造
浅野スレート販売
永柳商店
東洋コルク工業
伊丹商店大阪出張所
カール・ツアイス
奥村重兵衛商店
大阪ビトロライト工事
南満鉱業
浅野物産
ベニス工房
木下商店
米本商店
田村商会
玲光社
伊藤豊治商店
東亜鉄工所
大平工業所
油脂化工社
日本ホロタイル

KENSEISHOKAI
奥村重兵衛商店
鈴鹿工務所
原田商会
日本セメント防水剤製造所
政正
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
大阪陶業
大坪電気工業所
浅海商店
桐田商会
山中商会
阿部鉄工所
長田商店
日本工剤
大阪石綿工業
日本建築紙工
島田硝子製造所
日本ペイント会社
穴原商会大阪支店
中村グラニット商会

三菱造船神戸造船所
シーベル・ヘグナー商会
平岡襖紙店
山本東作商店
品川白練瓦
森川組
田中昌司商店
大福海上火災保険
伊奈製陶
HANKEN SEISAKUSYO
三井物産
小野田セメント製造所
近江セールズ大阪出張所
城口研究所
出浦建築事務所
新海建築工務所
大阪建築相談所
池田建築事務所
小笠原建築事務所
岡部建築事務所
大阪建築所
和田建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所

横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
野村、橋本建築事務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
増田清建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
遠藤於菟
設楽建築工務所
西原衛生工業所大阪支店
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯組
野村組

久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
藤木工務店
正木工務店
岡本工務店
鴻池組
有山組
駒井喜商店
安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
大阪耐火リノリウム工業
須賀商会
栄進社
松尾鉄骨橋梁
新田ベニヤ製造所
大阪青写真調製所
山本窯業商店

常盤貿易商会
高島屋呉服店
東洋建材工業所
日米建築資料社
河村青写真調製所
デウエット商会
萩原煖房工務所
東洋リノリューム
田中源太郎商店
建築金物商会